
今を生きるわたしを生きる私

高橋和絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今を生きるわたしを生きる私

【Nコード】

N8287E

【作者名】

高橋和絵

【あらすじ】

生きにくい現代社会を生き抜くため、情報化社会とか、バーチャル世代とか、しょっぱい友達とか、ワリと残酷な現実とかと戦いながらも、少女小梅はとりあえず生きてます。

ハルカワコウメ a (前書き)

小説更新に大変時間がかかってしまいました。

色々諸事情があり LOGOS EX MACHINA をある種再編成した新作をお送りさせていただきます。

ろこまきを読み進めてくださった方々には申し訳ないですが、引き続きご愛読くだされば有りがたいです。

また今作からは一話の分量を短編読み切り程度の量としたため、作業量の関係上更新ペースが一定とはならないことをあらかじめ報告させていただきます。

また現状での有無は解りませんが、性描写、グロテスクな描写を含む話には前書き部分で警告を入れるようにしたいと思います。

誠に自分勝手に創作を進めており、お相手をして下さってる方々には大変申し訳ないと思いますが、素人なりに出来る限り作品の質を上げられるよう努力いたしますので、どうかご容赦ください。

ハルカワコウメ a

みんなが生きる世界で。

あなたが生きる世界で。

私が生きる世界で。

こんなに豊かで、モノに囲まれ、光りに満ち溢れた世界。

苦しみも薄められ、悲しみも薄められ、都合良く日々が流れていく、そんな毎日。

ソレなのに、私の胸の奥にはチクチクと何かが刺さったように、どうしても消えない違和感が残る。

薄められた実感は、やがて私の存在すらも薄めてしまうようで。

何だか不安で、足下がおぼつかないような、そんな感覚にとらわれてしまう。

世界は、とても生きやすくなった。

だけど生きやすくなったハズのその世界で、どうしてもこんなに息が詰まり、先に進む感覚すら感じれずに毎日を過ごすのだろう。

スカスカと死んでいくだけの毎日を、タダ横目で眺め。

私は歩かぬまま、動かぬままに年をとり、そして死んでいくのだろうか。

私は、そしてあなたはどうかやって生きていく。

この生きやすく、生きにくい世界で。

どうやって。

それは中学校2年の私。

そのときの私はうだるようなアツいアツい夏の日上空高くから地面を見下ろしていた。

場所は高くそびえる丘の上の集合団地、鉄製の非常階段の上から、遠く下に広がる地面を見ていたのだった。

地面には団地の駐車場が広がり、車の屋根が並び、その手前には花壇。

手入れのせいか花はマバラで、残された花たちも真夏の日差しにあてられ茶色く萎びきっていた。

そして私は大きく息を吸い込んで、手摺りによりかかり、グッとその手に力を込める。

時間をかけてゆつくりと、一步踏み出し手摺りのパイプに脚をかけた。

カン、という金属を叩く音が、鈍く大きく広がり、それは私の中にも別の重さを持ってしみ通ってくる。

今日は、風が強い。

少し前に切ったばかりの髪を、暖かい夏のソレがすくい上げ、それと同時に心地よい清涼感がカラダを包み込む。

私は再び地面を見下ろし、そしてまた空を眺めて情けないため息をついた。

「はふ……今日は止めよ……うん」

力を緩め、踏み出した足を収めると、私はへなへなと床へ倒れ込んだ。

脚がふるえるのは高いから、汗が流れるのは怖いから。

不要な想像をしてしまい、どっと身体がアツくなった気がした。

「何も、こんな気持ち良い日じゃなくても良いよね」

自分に言い聞かせながら私は街を見下ろす。

街の中でも比較的高台にそびえるこの団地からは、周囲の風景が一望でき、私の家を含めたこの土地のほとんどを見渡すことが出来た。

その中には私の学校や、通学路、流れる河川や、行きつけの本屋、友人の家や、普通っていた幼稚園、かつての田畑、今では住宅街、そう言った全てが見て取れて、あまり街から出ない私には、その

ほぼ全てが人生の足跡であり、人生そのもののようである。

だからこそ、もし最後の瞬間を迎えるのならば、それはその全てが見える場所で迎えたいと思ったし、そうやって場所を探していたら、私はこの団地へとたどり着いた。

少しの間その景色を眺めていた私も「よし」と、今日もこの風景にきびすを返す。

カッソカッソと足早に、赤ッ茶けた金属製の非常階段を駆け降りて、先ほどまで見下ろしていた、地面へとそつと足をつけた。

自分が生きていることを確認するかのように、キツく握りしめた手を見つめ、ツメが手のひらを噛む感覚を確かめる。

そうして私は、今日もまた家へと帰ってゆく、何事もなく、まるで散歩でもしてきたかのように家へとたどり着くのだ。

「まーた飛べなかったなあー」

夏の日差しに手を透かし、思いつきり伸びをする。

空より降り立った大地に風はなく、いつもの夏の熱気だけが漂っていた。

夏休みつて、スキだけどスキじゃない。

ソレはきつと私に限ったことではないと思う。

長い休みは嬉しいのだけど、いざ何をするかというのはまた別の話であつて。

いざ学校がなければ何も出来ない私は、一体何をどうすればいいのだろうと、そんなことばかり考えしまう。

結局の所、空気は熱い照り返しと夏の湿気でムシムシジメジメとされていて、こんなコトなら止めなければ良かったと、今更ながらに口に出していた。

団地の立つ丘からはその景色へと続くアスファルトの道が続いている。

その景色の中に私の家もあり、わたしはトボトボとその道を下つていった。

道の周囲にはちょっとした雑木林が広がっていて、そこから伸びる日陰がアスファルトの上に私の道を作っている。

雑木林からはセミの声が届いてくるが、例年なら耳にこびりつくほどに鳴き叫ぶセミたちが、今年は少しだけ静かに聞こえる気がした。

耳障りなソレがないのはちょっとした喜ばしいこともあるし、それはまたちよつと寂しくもある。

あの声が聞こえることが夏の訪れであつたし、そしてゆっくりと減っていく事が秋が近づく印だつた。

そうして私は坂を下り、図書館や工場のわきを足早にぬけ、降り注ぐ日差しから逃げるようにして影の道を駆け降りていく。

車もなく、広い山道を独り占めするような気分は、なかなかにして気持ちの良いモノだ。

しばらく下つていくと途中、雑木林の中へと伸びる一本の細い階段がある。

コンクリートではなく石材で舗装されたそれは古い神社へと繋がる道で、私はよくソコを通っていた。

木々がトンネルのようになったその道は、当然のようにアスファルトのソレよりも涼しく、山道以上に滅多に人のいないソコは私のお気に入りだつた。

その通りに階段を降りていくと、ソコには神社の境内の裏側に繋がっている。

そうしていつも通りに古びた青いベンチへと座り、いつも通りな大きなため息を、ダハアと1つもらすのだった。

「やつほう」

と声。

振り返ったソコにいたのは、暑苦しい夏でもその野暮つたい髪を伸ばしたまんまの女の子。

同じく厚ぼつたいフレームの眼鏡がどことなく知的な印象を与え

ていた。

「おお、まおじゃん、どしたのこんな所で？」

「いやね、図書館の帰りに見つけたからストーキングしました」

「マジか？」

「まじでござる、で、そつちはナニ？ また団地に行ってたの？」

「ん、まあ、てか、別に良いじゃない、ねえ？」

と、私は友人のもつともな意見に口をとがらせた。

彼女も彼女でハイハイそうですか、と受け流し特別取り合う気もなさそうだ。

「大体そもそもナンでさー、意味解んないし」

「まあ、でっすよねー」

「またそんな適当な」

「があうー」

「ほらほら、拗ねるな、グレるな、噛むなつて」

「んー」

「まあ、アレだよね、迷う時期で言うか、何かそういう感じなのかね」

「んー、そうナンですケドー、あー、いや、私さ……ドウしたら良いんだろうねー？」

「だから、ソレを、あたしに聞いてドウする」

また面倒な、彼女はそんな顔をしつつも青ベンチへと座り、私の話を聞こうとしてくれた。

「私さ、別に辛いことナンで何もないんだよ……家族も優しいしさ、友達もいるし、家もあるしね、食べるモノだってあるし、お金だって少しは持つてるし、足りないモノなんて無いのにさ、ソレなのにナンでこんなにさ、ナンだと思う？」

「しらんつて、と言うかどないせよと」

どうして欲しい、そういうわけでもないつもりだし、どうにかなると思っではないのだろうが、ソレでもなんか口に出したいの

だった。

「えーと、じゃ、慰めて！　お願い！」

「ほーれ、飛び込んでおいで」

なんて広げられた両手に私は飛び込んだ。

「だってさ、ナンか申し訳ないじゃない、生きるだけでも必死な人間がこの世界には山のようにいるのに、私はこんなにも恵まれて、こんなにも充実しているのに、ソレでもナンでこんなに足りないの？　なんでさ、こんな私がのうのうと生きてるんだろう？　ナンでだと思う？　だってさ、だってだよ。知ってる？　世界の何処かではその日のご飯も食べられないで死んでる子供が沢山いるんだよ？　私より小さな子が沢山死んでるのに。おかしいと思わない？　何でこんなぐうたらで、頭が悪い私が生き延びてるの？」

「あー、とりあえずさ、顔を押しつけて喋らないで」

「あぐ、失礼……」

そうして彼女はぱりぱりと頭をかいて、どうしたモノかと言ったように視線を泳がせ、そして少し唸った。

「なー、ナンなら言うけどさ、なら言うけどさ、本当に四六時中、そんなこと考えてるの？」

「……………」

「自分の答えが出ないから、言ってしまえばソレも一種の八つ当たりじゃない、もやもやすんのを紛らわす方便でしょ、自分が憂いている気になって、そんていい気に浸ってる」

「……………うんー、かもね」

「だよ、もつと素直になりなつて」

「うーむ」

「ごもつともなんだけどね。」

しかしながらごもつともつちゃうというのは面白くないモノ。

そんな時の対応というのは認めるにも行かず、否定するにも行かずで、宙に浮きがちな私。

勿論付き合いの長い彼女にしてみれば、私の考えなどお見通しな

のだろうけど、それでもソレを明言するようなことはなく、はぐらかして相手をしてくれるのだった。

「まあ、気にならないのが一番よ」

「なによ……知ったふりしちゃって」

「突っかからない、私もスネねるよ？」

「あー、解ったよ、もう解ったから、もう私を虐めないでやっておくれ」

「自分から突っかかっておいて何か」

「あーもーゴメンって、だから、もう一回慰めて！」

「嫌、小梅べとべとだよ、汗くさい、てか臭い」

「ちょーあ！ そんなダイレクトに言いますか」

「言うさ、言うとも、アンタももう中学生なんだから、家でゲームばっかしてンのも良いけど少しは女の子っぽくなりなさいね」

「説教は無しで」

「したくもなるわよ、こう日々のずばらなアナタを見せられるとね」

「まあ、ねえー……」

「……少しは満足した？」

「うふふ、っテ感じ」

そして私はバっとベンチから立ち上がり、くうっと背筋を引き伸ばしてちよっとだけ辺りをうろついてそして。

「んー、じゃ帰ろうかな」

「あ、帰るの？」

「うん、まあちゃんはどうします？ 一緒に帰る？」

「いんや、いいや、山田書店もよってきたいし、山田薬局にもちよつとよらないとイケナイから」

「ん、一緒に行くよ？」

「いいの、アンタと一緒にじゃ本も選べませんで」

なんて酷いコトを言う。

まあ、確かに私がいたらアーダコーダと喋りっぱなしで結局本は

選べないのかも知れないけれど。

「ホンマ本好きやね、あんだ」

「アンタも読みなよ、たのしいぜ」

「やや、あたしはまだ漫画専門で」

「勿体ない」

「なあ、あんだだつてー」

「んふ、まあ、読むけどね」

そうして私は「じゃあね」とだけ告げて街の方へと伸びる下りの階段を降りていった。

彼女は何かを言いたげだったけど、私はちよつと気付かないフリをしておいた。

響くのは私の足音と、セミの声。

ソコにいるのは私だけ。

中学2年の夏の日々、私はとても充実して、とてもハツラツとして、そしてちよつぱり寂しかった。

とぼとぼと家にたどり着いた私のカラダを汗が一筋つたい、それは地面へこぼれることなく服にしみこみ見えなくなった。

さすがべたべたと言われただけのことはある。

私の家は木造の2階建て、決して真新しいと言っわけではなく、閑静な住宅地というよりかはモロに田舎臭が漂っている感じの懐かし物件。

それでも私はこの家が好きだとはつきり言うことができるのは、ソレはきっと私が父や母のコトが好きなのだから。

所々軋む床板も、色褪せた瓦や外壁の色も、全ては家族との思い出であり、そしてまた変えがたい家族の歴史。

きつと私はコレからも、この家からは離れられないんじゃないかと、おぼろげながらも私はそう感じていた。

「あ、パパだ」

と道の反対側から一人の男性がやってくる。

本来ならまだ仕事中の時間だが、何時も重そうな鞆を持ち歩いているその姿は遠目に見ても父だと解った。

こんな暑い中でもピッチリとスーツに身を包んで、40代も近いハズだったけどその顔は年齢よりか若く見える。

やせ形とはいかないまでも太つてるともいかない、そんな父の姿は少しばかりではあるが、幼い私の理想の男性像を作り上げていたものだった。

まあ、私は総合的に年上趣味であつて、ソレは年上趣味ではなく、もしかしたらオヤジ趣味なのかも知れない。

「おー、梅か、どした、今日も散歩か？」

「うん、パパは？ リストラ？」

「だはは、違う違う、えーとな、今日は仕事早く終わったんだよ、部長が折角だからお前らとつとハケちゃえつて、パパもようやく明日から夏休みだ。まあ、一週間も無いんだけどね」

そう言つて父は茶目つ気のある笑顔を浮かべ、ぽんぽんと私の頭に手を置いた。そんでべたべただ、とか言つた。

「いやあー……暑いな！」

「うん、暑いね」

「汗だくだな！」

「かもね」

「よーし、ソレじゃあパパと風呂でも入るか！」

「なー、やっぱりそう来たか……もう私中学生だよ？ セクハラだよ？」

とげんなりとした表情でその要望へと答える。

すると父はもとより細長い目を更に細くして唸るのだった。

「んー、いやあパパも最近寂しくてな、小梅も中学入った辺りからすっかり相手してくれなくなちゃったしさー」

「そー言われましてもねえ、まあ、確かに、ご無沙汰なコト多いけど……」

「やあ、まあ、早くパパも子離れしないとだめナンだけどね、ゴメ

ンなあー本人に言ってもイヤミなだけだよなあ」

と手をヒラヒラさせて苦笑いをした。

そんな顔をされてしまうと、どうにも居心地が悪いというか、間が悪いというか、そんな感じで、私は少しむっとして、別に、とだけ言っただけでささと家の中に引っ込んでしまう。

そんなこんなでちよつとだけ寂しそうな父の顔を見ているのは、ソレはソレでもやややるのは今も昔も変わらないのだった。

結局私は、父が入っている最中お風呂場に押し入った。

父は急なことで目を丸くしながら、慌てて大切なところを隠そうとする。

一緒に入ろうなんて自分で言っておきながら、いざそうになると妙に挙動不審なのは実に父らしい。

そんな姿は妙に私を安心させ、何だかふつといろんなコトをどうでも良い気持ちにさせてくれる。

「いやあ、でも小梅も大人っぽくなったなあ」

「セクハラ親父め」

「いや、ゴメンゴメン小梅は母さん似だからさ、アイツの子供の頃って小梅みたいだったんじゃないかなんて思ったら、ちよつとなんか懐かしくなっちゃってさ」

「母さんかあ……」

「うん、あれもあんなだからね、写真も何もあんまり見せてくれなかったんだよ。僕はまあ、嫌がるのは強制したくないし、まあ触れないでコトも無しってなら出来る限り昔のことには触れないようにはしてたんだけどね」

そう言いながら、父は狭い浴槽で手を組みグツと身体を伸ばした。
「あー、いや、でもねえ、母さん今ではぶよーんでびよーんだけど、昔は結構バインでバインだったんだよ？」

「うっそ……ホント？」

「いや、ホントのホント」

「なら私も……?」

「いや、その血は流れてないと思う」
なんてガツクリ。

ソレは確かにそう言うタイプの人間ではない力モだけど、と言うかどちらかというと幼児体型かも知れないけれど、そう父親にまでハッキリ言われては傷つくというモンだ。

腹いせに風呂桶で湯船のお湯をすくい上げ、父へとぶっかける。

そしてキャツキヤと笑いながら、父にお湯をかけられるのだった。

「ああ、そうだ夏休みはどうなの? 予定とかは、宿題とかさ、まおちゃんとかとは遊んでないの?」

と言うのは私が好きではない話題。

そんなことでついつい顔を逸らし、そしてまた、別に? と小さくこぼした。

父の顔は、ちょっと寂しそうで、ちょっと不安そうで、こちらを覗くようにしながらも「そうかー」と言うだけでそれ以上聞こうとはしない。

私だつて別に、宿題が終わらないとか、予定がないとか、そう言ったことを隠したいのではない。

それはそう、面白みのある日常が無く、毎日が同じように過ぎていくソレを喜び勇んで話すような、そう言った気持ちは私にはなかったとそう言うことだけ。

それでもソレを直接口に出せない私は、どうしてか父を傷つけてしまっていたのだろうか。

「パパは?」

「ん?」

「何か予定はあるの?」

「あはは、あーあんまりかなあ……明日職場の同僚とお酒飲みに行くケドね……ほら、だからさ、小梅に予定がなかったらさ……何処か行こうか、なー、とか、さ?」

なんて父も、こちらを見ることが出来ないままに、ちょっとこち

らの様子をつかがうように、先ほど言えなかった言葉を紡いでいくのだった。

距離をつかがい、娘の様子をつかがいながら、父はいらぬ氣を使い、私の機嫌を取っている。

「んー、考えとくね」

当時の私は残酷で、残酷な子供であって、父はその言葉で、自分の休暇は特に家族ふれ合いもないまま終わるということを悟ったのだろうし。

そうして私は何事も考えることなく、父の優しさも忘れていき、そうして夏休みを終えていくのだろう。

本当に、私は残酷だった。

ソレがどれほどのことなのか、気づくことすらできない。

本当に軽い気持ちで、私は父を傷つけていた。

「ねえ、パパ……」

「ん……？」

「もしさ、私がさ」

「何？」

「んー、死にたいって言ったらどう思う？」

目を丸くした父はふうと、小さくため息をつき。

何かを考えるように天井を見上げ、そしてこう答えた。

「あー、そうか、ん」

「……」

「理由かな、なんでだっ！ て聞いたりと、そうするかな……」

そう言った父の顔は、決して怒ってはいないのだが、それでも直視するのは辛いモノだった。

「なんでって、なんで……？」

「だってなア、自分の大切な娘がいきなり死にたいなんて言い出すんだ、何があつたか氣になるし、ナンでそうなったのか聞きたい、もしかしたらパパが力になれるかも知れない、だからかな、そんな

難しいこと急に言われてもパパだって困っちゃうなあ」

「パパ……」

「どーしちゃったんだよ、小梅なんか変だぞ」

と言ってちよつと引きつった笑みで私を撫でてくれる。

残酷な沈黙が、私と父の距離を少しずつ少しずつ遠ざけていくような感じがした。

ソレは次第に溝を広げ、暖かいはずのお風呂も何だか少し寒々と感じる。

おかしいな、こんな結果は求めてなかったハズ。
なら、私の望んでいた結果って何なのだろう。

「だわああはツツ！」

突然父が奇声を上げながら湯船から立ち上がる。

ぽかんとしている私を半ば無視して、盛大に盛大に雄叫びを上げた。

「がああダメだ！ この話は良くない、暗い！ 父の権限で即刻中止する」

「ナニソレ！？ え、何、急に！？」

そうして父は私の頭へと手を置いて、そうしてゆつくりと、今にも泣き出しそうな私を撫でてくれた。

「まあ、そんなに気にしないで良いから」

「だって……」

「いや、小梅ももうそんなことを考えるようになったんだあつて、さ、気付かないうちに大きくなったんだあつて、ちよつと思っちゃった」

不思議な顔をしている私に、父は続けた。

「パパだって、そういうことは考えたことがある、何かもやもやして、ワケわかんなくなつて、時には何か死にたくなつたりして、将来的な心配とか目標のない不安感とか、ダレだって感じることだしね」

「そうなの？」

「うん、まあ、そうだね……ただ、まあ高校生になったあたりだけどね」

「そう、なんだ」

「んー僕がまだ小梅ぐらいの頃は、その、なんて言うかもっと子どもっぽかったと思うよ、小梅はまだ中学生なんだから、中学生なりで、それなりで良いんだよ、そんなこと考えるには早すぎる」

「そうかな」

「そうだと思う、子どもはもっと遊んでさ、楽しんで、ソレが仕事だよ。子どもが死を選ばなきゃいけないような問題なんてあっちゃいけない」

その時の私はどういった顔をしていただろう。

驚いた顔をしていたかもしれない。

勿論父の子供の頃なんて知らないし、ソレを話す父だって知らなかった。

それどころか、これ程に饒舌な父を見ることがすら稀なことだったのかも知れない。

「いやあ、パパも上手くは言えないんだけどサア、小梅達はパパとは違う世代に生まれてるからね、パパとかとは違った考え方をしちゃうのかなってさ。もしもそうならソレはきつとそんな時代を作っちゃったパパ達に責任があるのかもしれないって」

そう思うのだ、と父は自嘲気味に微笑み、頭をワシワシとかいた。父が嫌がることは嫌、そんな発想だった私は、パパは悪くないよ、と思わず声を大にする。

とても嬉しそうに「そうかそうか」と言う父は、いつも通りの笑顔を浮かべていて、思わず私も少し嬉しくなっていた。

正直に言ってしまったえば、当時の私は半分も父が言いたいことを理解してい無かったと思う。

今になって考えれば、もう少しゆっくりと父の話を聞くべきだった

たと思うけど、考える力も無い上に、考える時間すらも失いつつある幼い私たちはソレは難しいことだったのかも知れない。

次々と溢れるモノ、価値に、情報に押しつぶされ、飽きることを強制され、新しいモノを強制された私たちの世代。

あまりに多様化した価値観は、ゆつくりと私たちに忍びより、自分たちの存在の価値観すらも酷く稀薄なモノに感じさせてしまう。

選びきれない価値という強い光りに照らされて、外界より自分の価値を見出すことの出来なくなったコドモたちは、ソコに価値を求めて自分という世界をゆつくりと掘り進んでいく。

けどそう、そんな幼い私たちには自分を掘り進んでいってもたどり着くところ何て用意されているわけが無く、そうした私達がたどり着いたのは、一種の絶望であり、一種の虚無であった。

何もない、何者でもない自分は、無知故に来る世間への不安、無知故に待ち受ける将来への不安、そして無知故に苦しむ今への不安に耐えきることが出来ずに、そうしてゆつくりとこぼれ落ちていく。知らないのに、知っているようになれるから、子供なのに、大人みたいに振る舞えるから、辛いのに、辛くないみたいに見せられるから、コドモたちは、そして幼い私たちは、そんなにも解らない自分に苦しんで、そうして日々、死にたいと口ずさんでいた。

そうだね、子どもはもつと単純で良いのだと、私たちは知らなかっただけなのかも知れない。

そうして私は父と久々に長い話をした。

日常から掘り出したほんの取るに足らないことであっても、ソレを楽しそうに話すだけでパパは大げさなりアクションで喜んでくれる。

私もソレにつられて笑い、少々のぼせるまで二人で久々のお風呂を楽しんだ。

今思えばその後父とお風呂にはいるなんてコトは、一度もなかったのかも知れない。

私が忘れてしまっているだけかも知れないけど、そんな中であって、この日の記憶だけはしっかりと私の中に残っているのだった。

小さな庭に面した小さな縁側で、私はアイスを頬張る。

やはり今年は、セミ達の声が小さい。

例年は家の中にいても、夕暮れに響くセミたちの声が、ジージーと届いてくるのに、今年はどうだろう、耳を澄ませば聞こえてくるような、そんな細かいモノでしかなかった。

「うーめー、パパもアイスもらって良い？」

と、台所の方から父の声がした。

「いいよ、但しカップのヤツ食べたら私もパパとはいえど容赦はしないから」

「解った、肝に銘じておく」

としばらくすると、ソーダ味の水色アイスを持った父が、のそのそと縁側にやってきた。

この縁側は二人でいると本当に狭い。

「パパがアイスなんて珍しいね」

「そう？」

「ん、パパアイス食べると腹冷やすって、いつもあまり食べ無いじゃない？」

「ああ、かもなあ、まあ、たまには良いじゃない」

「うん、どぞどぞ」

と、カラダをスラし狭い縁側に父の座るスペースを作った。

父は「それでは失礼して」と、どっこいしょなんて言いながら座り込んで、そのアイス棒にしゃくと口を付けた。

「なあ、小梅……」

「何？」

「あ……いや、さっきのこと、ママが聞いたらどんな顔するかと思っ
つてね」

「殴られると思う」

「だはは、確かに、怒られるよなあ。まあ、さ、パパもできれば聞きたくなかったけどさ、まあ、聞いたから解ったこともあったからね、一概にはドウコウ言えないけど」

「うん……」

「だけどさ……」

「うん？」

「頼むからさあ、パパより先には死なないでくれよ」

なんて、多少呆れるような声のニュアンスで、父は言った。

真っ直ぐすぎる自分のメッセージが恥ずかしかったのかも知れない。

こちらには顔を向けず、いつも通りのちょっと疲れたような、ちよとおちゃらけた様な調子で、固く強く、そう言った。

「うん、ごめんなさい……………ねえ、パパ」

「ん？」

「抱き付いて良い？」

「お、パパは何時だって大歓迎だ」

なんて言うので、私はぎゅっと父へとしがみついた。

お風呂上がりではあったけど、忘れかけていた父の匂いが、私の中にそっと広がる。

申し訳ない、あの気持ちは何年経っても変わることはなく、ソレは今になっても同じコト。

どれくらい時間がたったか、手に持ったままのアイスが少しずつ溶けはじめ、ソレが指にひやりと触れたとき、私は残っていたアイスを一気に頬張った。

「おうおう、お熱いデスなあ」

「ん……」

ヤツはいつの間にか家の中に座り込み、そうして私の背中を見つめている。

私は慌てて父から離れ、縁側に寝そべるように仰向けになって家

の中を、彼女の事を睨み付けた。

「だっ！ バカまおっ、勝手に人の家に入るなって言ってるじゃない」

「やあ、まおちゃんこんばんは」

「どうも、こんばんはオジサン」

なんて私を無視して挨拶するなよと、私は悪態をついていた。

「何時からみてたん？」

「ワリと初めの方から、あーあれさ、今からさ、夕日見に行かない？」

「夕日？」

「そう、夕日」

「なんでさ？」

「うん、前に何かの本で読んだ、人間は寂しくなったら夕日を見に行くんだって」

「そか……」

私の手には蚊がとまっていた。

気付いた頃にはソイツは既に飛び立ち、後には不快な痒さだけが残っている。

私はまおの顔を窺いながら小さくため息をついた。

まおのヤツは私よりも解りやすく出来ている。

「あー、じゃあ行く？」

「おお行こう、オジサン、小梅借りてきますね」

「ああ、ちゃんと返してね」

「もちです」

「そいじゃ行ってくるね、パパ」

「おー、気をつけろよ」

「うん、決着つけてくる」

「ほお」

「ナニ、決着って？」

「すぐに解るよ、ささ、行きましょ行きましょ」

夕暮れの空は少し涼しくて、ゆっくりと傾いていく夕日を横目に見つつ私達は丘の上へと走っていった。

山道を登り、いつもの神社を通り抜けて、そうして階段を駆け上がる。

工場を過ぎ、図書館を通り越して再び丘の上の団地へと駆け上がる。

カンカンカン。カンカンカン。

固い金属を踏みしめて、ひっそりと高鳴る鼓動を押し込めて、私達は空へ空へと上っていく。

はじめは雑木林だった遠い風景が、徐々に上るに連れてあの街並みへと変わっていき、空高くに浮かんでいる赤い赤い光りと熱の塊が、今では街の真上に降りてきていた。

真つ赤な真つ赤な夏の夕暮れが、メラメラと、広がる全てを赤く染め上げて。

私もその赤い顔で、赤い瞳で、その赤い世界を見つめる。

熱く切ないソノ風景は、どうしても美しくて、どうしても儚くて、そしてどうしてもかけがえのない大切なモノ。

この世界を見つめる今の私、この私だけは誰にも譲ることの出来ない私。

今を生きる私。

「さあ、どうしよつか?」

まあは私に問う。

「どうってどう? アンタが来ようって言ったンじゃん」

「まあ、そうなんだけどね、けっこー綺麗じゃん?」

「んー……」

「ここさ、あんたの自殺スポットだよな」

「うん、そうだけど。まあ、別にドウもしないよ、私は夕焼けを見に来ただけ、それだけ」

そうして私は真つ赤な笑顔で振り返り、あっけらかんとした表情でそう言った。

「それに、やっぱり私は解らないもん、確かにキビシくって辛くてモウイヤダって思う事なんて山のようにあるけど、ソレでも死ぬのはホントの最後の選択肢だし、だから死ぬなんて解らない、多分私は死にたくない、ココロから死にたいなんて、思ってない」

「そうなんだ……」

「うん、何かね、死なないでー！ 言ってほしいだけなのかもしれない、そうでもしないと自分が必要とされてるか解らないみたい」

「あはは、その気持ちは分かるなあ」

「死のうとしてたら誰か止めてくれるかなって、助けてくれるかなって思うんだけどさ、結局誰も気付かないし、気付いても助けてくれるかなって解らないしねえ」

「バカだよな」

「うん、バカだと思う、一種自分の中での整理みたいに考えてたのかもしれない」

「オジサンのこともその程度で考えてたの？」

「そうでもないと思う、いや、別にそんなつもりはないよ、ただパパは優しいから、優しいからついさ、ついつい甘えちゃう」

「まあ、良いけどさ」

「解ってる、汚いヤツでござーますよ私は」

「なんだよ」

「私はさどんなことを言えばパパが心配してくれるか、どういうコトをすればパパは私を気にかけてくれる解っててやってるから。私はお姉ちゃんがいいたからかもだけど、スツゴクそう言うコト気にしながら生きてきたから、どうやってヒトに気を使わせるか、ヒトに意識させるか、打算的で、ずるいけど、そうやって私は生きてきたんだもん。死にたいと思う気持ちも、ソレに対応する周囲の気持ちも、そう言うの全部自分を保つために利用しているんだもん」

「そっか……で、どうだった？」

「パパ？」

「ん」

すると私はちょっとぼつが悪そうに頭をかいて、そうしてその顔を見せないようにそっぽを向いて街を見下ろした。

「まあ、世の中思うようにはいかないね」

「ふん、バカめ、てか飛び級のバカだね、てか飛んでしまえ」

「あんまバカバカ言うなあ、てか飛べとか言うか普通、まあバカだけど」

「まあまあ」

「んー、まあー予想外だったね、そもそも予想すらあんまり立ててなかったのかもしれないけど、正直大人ナめてました、親ナめてました。スイマセン」

「私に謝ってドウするよ、私知らないから」

「だね」

ゆつくりと夕日は沈んでいって、真っ赤だった世界は徐々に闇の気配を帯びていく、高い空はやがて黒く、青くなり始め、そうして太陽は着実にビルの間へと姿を潜めていく。

「まあは、ナンでここに来たの？」

「んふー、それは、寂しいときは夕日を見るからで、一人で見るよりも、二人で見る方が寂しくないと思って」

「それでどう？」

「分かんない、もっと寂しいかも知れない」

「ナンで……？」

「分かんない」

彼女は何時も自分から私へ話しかけてきた。

それは、私は自分から人に話しかけるようなことが無いし、それでは彼女は寂しいから。

だから彼女は執拗に私に絡みついていた。

「うがー」

「何？ 小梅？」

「だったら言うよ、決着つけるよ、もう止めようよ、自殺未遂なんて、私やだよアンタが死ぬのなんて」

大きな沈黙が流れて、夕日は街に没した。

彼女の顔は悲しげで、そして少し焦っていた。

それは一年前の夏の日。

彼女はこの非常階段から実際に飛び降りたのだった。

その時は幸い、木と、ソノしたにあった花壇のおかげで一命は取り留めたが、それは当時から親しかった私にとっても世界をひっくり返すような出来事だった。

彼女は両親の問いかけには何も答えなかったが、私の問いかけには答えてくれた。

何かが嫌だったんじゃない、全てが嫌だった。

誰かが悪いんじゃない、自分が悪いんだ。

私は小梅のように振る舞えない、私は、私を生きるしかないのに。

「ゴメン、今日はダイジョブ、ただ、ちょっと母さんと喧嘩しちゃって、あんまり考え込むとイケナイから、だから、ほら、小梅に慰めてもらおうと思って」

「……」

「仕方ないじゃん……私は、私はそう言う生き方しかできないから、私だってさ、アンタと同じような事を考えるし、アンタと同じ事で苦しんでるんだから。だけどさ、私はアンタとは正反対だし、アンタのように生きられない、誰もが自分みたいにナンでも脳天気になんて考えないで」

そうして彼女はこっちを向いて、そうして肩をわしと掴んだ。

「私は、そうだよ、真似事じゃないッ、アンタとは違って、死にたいよ！ 死んで、もし楽になるなら死にたいよ………」

「そう、だから決着つけようよ」

「……？」

「本当に辛いなら、アンタと一緒に死んであげるから」

彼女は驚いただろう。事実顔は驚いていた。

そう思いながらも私は手摺りをまたぎ、高い高いアパートの非常階段、その外側に掴まる。

手を離すだけで私の身体は遠く下の地面へと落下して、ぐしゃりと、まるでトマトのように潰れてしまっただろう。

慌てる彼女をよそに、私は体の向きを変え、階段に背中を向けて後ろ手に体勢を立て直す。

まるで十字架にかけられたキリストみたいに、両手を伸ばし、脚をそろえて、私は叫んだ。

「ほーらっ！　一緒に飛ばうよ！　コレで全て解決！　寂しくもない、楽にもなれる、みんなコレで解決！」

「ナンでッ、ンなコトするの！　あんたがソンなコトしても、ナンにも意味無いじゃない！」

「意味ならあるよ、私たちは運命共同体だもん。こんな世の中をお互い手を取り合って生きていける数少ない仲間だから。だから私は自分の命かけてでも一緒にいれる友達が欲しいんだ。どんな人間も同情はしても一緒に死んではくれないって……だから私は一緒に死んであげる、アンタに、その気があるなら、いくらでも一緒に死んであげるから！　だからッ！！　だからッア！！」

風が強い。

私の身体は強く揺さぶられ、私も瞳に涙を浮かべ、ふるえる脚に力を込めて、そしてまたソレを彼女に悟られないように、笑ったようにとした。

そして彼女は私に抱き付くように、腕を回して私を押さえ付けた。手を回した瞬間に、私の口からはゴメンという言葉が漏れ、彼女は思いつきりの力で私を抱き留めた。

「ばか、死ねよ、ソレじゃ、死ねないじゃん私」

「あ……あは、は、なは、ゴメンね、こんなやり方で、それでもアンタは優しいから……私は、アンタに頼っちゃう。ゴメンね、こん

な私で」

「いいよ、いいって、もういいから」

「うん」

「ねえ……知ってる？ 私たちは……生き続ければ大人になっちゃうんだ、そんでもって大人になったら誰も私たちのコトなんて心配してくれないんだ。死にたいと言っても周りから帰ってくるのは、じゃあ死ねばって。だから。私も一緒にいてあげるから、もしアナタが死にたくなっても、私が何時でもいてあげるから、もし死ぬときは一緒に死んであげるから」

「……あんがと」

「どういたまして」

「ゴメンね、また利用して」

「もう慣れました」

「んふ」

「……ありがとね」

「あーはは、怖かた……怖かったー」

私たちは非常階段の上で、日が落ち、灯りが浮かぶ街を眺めていた。

そうして何がおかしいのだろうか、笑いが止まらなかった。

「はあ、ねえ」

「何？」

「約束」

「ほう？」

「また見に来よう？」

「この先も生き残れたらな」

「そのつもりで」

ひとしきり息を吸い込んで、そしてひと思いにはき出した。

「じゃあー私は、死にません！」

繰り返し、繰り返し、彼女はこの風景に叫び続ける。

絶対絶対生きてやるから。

まるでこの空と約束でもするかのように、彼女は喉がかれるまで叫び、そして伝えた。

どんなに苦しくても、どんなに辛くても、だけど絶対死なないから。

生きて、そしてまた見に来るから。

だから、1つだけ約束して欲しい。

お願いだから、私のことも見守っていてください。

タスケテなんて言わないから、忘れないで見てください。

いずれ社会は私のコトなんて気にもとめなくなる。

そんなときは、私はこの思い出を抱きしめて、生きて行けたらいいな、なんて。

そんな甘くて、しょっぱい幻想を抱いて、私はこの日を決して忘れない。

今を生きる私。

ソレを生きる私。

ハルカワコウメb

私が高校生になったとき、ソレは全世界へと広まった。

何時でも何処でも誰にでももの謳い文句の下、ユビキタスネットワークはついに人々の身体にも忍びより、人類は本当の意味での場所を選ばぬネットワーク接続を可能とした。

世界の距離は大きく縮まり、田舎の商店街に居ながらに高級デパートでの買い物が可能となり、学校に居ながらに、コドモたちの脳はゲームセンターへと繋がっている。

ある意味で夢のような社会、文字通りの夢のような社会。

当然裏には山のような問題を抱え、解決できぬままに広がった文明の利器は、まるで急速な経済発展の代償とした公害問題の如く、各地にその爪痕を残していく。

イツでも、ドコでもは解決されながらも、ダレにでもは何時の時代だって解決されない。

情報格差は社会的な問題にまで発展し、イツでもドコでもの知識のライブラリへと開かれた階層と、古めかしく重い紙のライブラリに押し込められた階級とで世界は二分された。

学校にしたってそう、バカと罵られる子は大抵低所得者の子であり。

テストすらも今まで通りにはとり行えず、経済力が子供の成績に直結しないよう、先生達は金属探知器を導入するなど、周囲からは滑稽にすらうつる努力を繰り返すのだった。

知らないのに知った気になる、そんな人間で世界は埋まり、世界は無知な知識人で埋め尽くされた。

そうして次第に知るという行為すら稀薄になっていく、理解するという事自体が無意味になっていく。

だってそう、全ての人は即座に全ての知識に繋がっているのだ。
私の知っていることなんて、大抵あの人も知っている。

あの人の知っていることも、大抵私は知っている。
そうして個は更に薄められ、情報という海の中、人類はある種の
1つの生命へと成り代わろうとしていた。

「でー、まおちゃんはよ？」

学ランに身を包んだ男、本城はそう私に尋ね、かつたるそうに肩
を大きく回した。

「塾だって」

「塾だって？」

「うん、そう言ってた」

「塾だって、てか」

「うん、いや、違う、そうじゃなくて、てか夏期講習だけど」

「いや、解ってるけど、そか夏期講習ね」

そうして彼は再びかつたるそうに肩を回す。

「じゃあ今日は俺達二人だけか」

「そうだね」

「や、ホントに、俺での部屋で良いのか？」

「ナニ赤くなってるの」

「赤くなってるなんていまして、と言うかお前も女子ならそういう
トコロ遠慮しようよ」

と、彼はばつが悪そうに肩を回した。

スポーツ刈りだし、不良っぽいし、若干強面なこの男だが、そう
言った点では結構かわいげもあったりする。

「そう言えばさ、5組の知ってる？ 山田って」

「あー、うんー、自殺したんだっけ」

「ん、ソレの理由聞いたんだけど……知ってる？」

「知らない」

「それがさア、聞いたトコロによると携帯ハードディスクをウイル

スでやられちゃったことが原因だそうで」

「うえ、なに、たったそれだけで？」

「そーらしーよ」

「ナンでまた」

「んーなんでも大抵のことは自分で覚えなくてそんなに詰め込んでたらしいからさ、言ってみれば頭の中を全部持ってたかっちゃった感じで、スッゴイ喪失感が、スッゴイ空白になって、最終的には自分が何だか解らなくなっちゃったんだとさ」

なんて、言われてみれば確かに怖い話だ。

自殺した彼女は言ってみればハードディスクという記憶媒体に自分を委託していた。

機械に思い出を預けて、そうして自分はナニをしていたんだろう？

「バックアップとか、とってなかったの？」

「とってたらしいけどな、とってたってその事もウイルスで飛んじやったんじゃないの？」

「こえー」

「こえーなー」

そうして私達は山道を登っていく。

彼の家はあの団地よりも更に丘を登った先、携帯圏外のギリギリの地点にある。

涼しい山の風が辺りを漂うソコは、私たちにしてみれば身近な避暑地のものであり、知り合った頃から暇さえ有れば、そしてことさら夏場は彼の家に入り浸るコトが多かった。

ちなみにまおがないことは珍しい。

まあ、私たちだってそろそろ遊んでいるダケではいけないのだけど、都心の大学へ行った姉でさえ3年生になるまでは遊んでいたんだ。

それと比べればまだまだ大丈夫と、何処か安心しきっている自分が不安になったりもしなくもなかった。

「そう言えばさ」

「何？」

「セミ、鳴いてないね」

「まだ、早いだろ」

「そっか」

「そうだと思う……そう思いたいな」

「だね、そう思いたいね」

そんな思いとは裏腹に、山道は完全に静まり返り、木々のさえするような擦れだけが響き渡っていた。

「おじゃまします」

「じゃまします」

正直私の家より都会チックで、まさに家！ と言った感じの風貌の彼の家。

建ててからもあまり経っていないためか、その白い外壁は山の上の風景からは少し浮いて見えた。

まあ、行っただって私らは大抵ゲームしかやってないのだけど。

おやつも出てくるソイツの家は絶対あたしんちよりは居心地が良かった。

「何やる？」

「ナニやるっか？」

私は彼の部屋にはいると何食わぬ顔で冷房をつけ、人の家であることも構わずごろりと床に寝そべる。

高校生の男子の部屋としては片付いてる方だと思うし、何かと見た目によらず几帳面なこの男らしい部屋。

すっかり我が物顔な私は、もはや部屋の何処に何があるかまで把握しつつあった。

「なあ、小梅のコンタクトってVチャンネル対応してる？」

「何で？」

「なんでも」

「まあ、うん、確かしてたと思うけど」

「んならよし、うん、まあ、実はもとよりやるモノは決めてたのだけだね」

「と、言うത്？」

「実はコレ、ほい」

「何のディスク？ と、手袋？」

「うん、3Dネットワークサービスの」

なんてワケでネットワーク技術の進歩は人類に仮想現実の体感すらも提供できるようになっていた。

一昔前はSFの世界だけで繰り広げられていた手の届かぬ人工の夢は、金さえ払えば手のひらに乗るゲームのコンテンツの1つとなっている。

「ふお！ おあ、マジですかッ、あれ、噂のっ？ 手に入らない！？」

「そう噂の」

「あたしもやって良いの？」

「勿論そのつもり」

「ありがとう、青狸！！」

そうして私は彼のジョリジョリのスポーツ刈りをなで回した。

真っ白なネットワークロビーに、私のココロは沸き立っていた。今までの人生で一度も見たことがない程の圧倒的な白い世界。それは人の手でないと作り出せない無垢な白さ。無意味な白さ。だからだろうか、今までにないほどの“来たことがない感”を刺激され、私はむちゃくちゃにハイテンションだった。

仮想現実とまで言うのだから、私はてっきり全ての感覚がゲームの中に移るモノと思っていたのだけど、実際のところは視覚的なモノがメインのよう。

触覚等はもちろんのこと、視覚なども現実と共有しているため、

二つの身体を同時に操るようなそんな不思議な感覚がする。

言ってみれば起きたままに夢を見ているカンジ。

初めはゴチャゴチャするかと思つて気にしていたけれど、集中してしまえば残る感覚の方はあまり気にならないようだった。

「よう、来たか坊主！ お、アバター結構似てるじゃん」

「テンションたけーよ、少し落ち着け」

「うへへ」

何時の間にかソコにいた本城っぽい顔の男性が肩を回しながらやつてくる、落ち着いてるように見えるけど、それでもワクワクしているのは感じ取れた。

「そいえばいいの？ IDとか作っちゃって、コレってアンタの家族のヤツでしょ？」

「ん、いいッぽいよ。IDは無料でいくらでも作れるみたいだし、お前も手に入ったらそのIDで引き続き使えば良いんじゃない？」

「あ、そなんだ、ならお言葉に甘えて」

「おう、甘えとけ」

「んお」

「ん？」

「……で、あれさ、私は？」

「なにが？」

「似てる、顔？」

「うん、美人過ぎだな」

とかまた傷つくことを言ってくれる。

そりや確かに多少背伸びしたかとは思うけど、背伸びって言うか身長とか胸とかも少々水増ししたけど。

そりやゲームだもん、ちょっとばかり夢見ても良いじゃないの、と彼の背中をどついた。

彼も彼で悪びれたカンジもなく、悪い悪いとひらひらと手を振つて、どうしてか私の周りの男共は私をあんまり女としてみてくれない。

まあ、私だから仕方ないっちゃ仕方ないんだけど、どうにもやる気のない女根性が今後も目覚める兆しはない。

「うがー」

「だあ、もー、スねるな、悪かったって、解ったよ、悪かった」

「解ればいい」

「んーまあそうだなあ。あーそれでさ、ウメさん？」

彼はちよつとばかり気マズそうな顔で私を見て、なんだかちよつと優柔不断な態度で私に尋ねてきた。

「んー、ナンでしょっか？」

「いやさっきの話とは違うんだケド、お前ってさ、占いとかな予言とかって信じる？」

「予言？　と言いますと？」

「いやあ、色々あるじゃない」

「はあ」

「んー」

「んー？」

「いや、2943文のコトなんだけどね」

「んえー」

2943文、正確には2943警告文と言うソレは、名前だけなら大層なモノのように聞こえるけど、言ってしまうソレは単なるスパムだったりする。

呼びにくいモノは略されるネット用語の運命か、今では29文とか、肉文とかなんだか微妙にいかかわしい名称で呼ばれてしまっているそれは、ユビキタスネットワークシステムの本格稼働と同時期に増え始めたらしい。

メールだけではない、ネットワーク上の掲示板からブログにいたるまで、ありとあらゆる場所に広がっていった差出人不明の警告文。おそらく何処かの一個人が始めたモノをネットワーク上の有象無象が面白がり、自分勝手な警告を各地にバラまき出したのが始まりだと思う。

その内容はネットワーク上の注意やマナーから、災害時の備えにいたるまで完全にバラバラであり、本当に役に立つモノからまったく役に立たない虚言警告までその数は増える一方で後を絶たない。中にはウイルスに近いモノまで出回り始め、2943警告文に注意してくださいという、2943警告文まで出てくる始末。

ナンでそんなモノが広がったのかと言えば、きっと相手に注意するって何か気持ち良いのだろう。

匿名で見ず知らずの人間に注意をする。

まあ確かにこのご時世、ちょっと注意をするだけでも嫌なヤツ扱いってけっこう多いしね。

一方で相手の役に立ちたい、もう一方で他者の行為をとがめたい、その中間的な感覚が人前では言えないような気持ちを吐き出させ、ソイツらを満足させてるんだと思う。

勿論、ソレを喜んで受け取る様な人間は極希だし、実際のトコロは迷惑メールでしかないのだけれど。

「あーまあ、ソレは解るケド、何さ？ またナンで今更？」

「お前さ、いーっちゃんはじめのこの警告文の内容って知ってる？」
「知らない」

「この文章は警告です。本日より施行されるこのネットワークシステムはいずれ人類に壊滅的な異変をもたらします。そしてこの異変はネットワークに直接関与した人間に止まらず、社会全体に広がって行くことになります。」とかそんなカンジ」

「うはー、ナンという世紀末予告、携帯の電波あびたら死ぬぞ、みたいなものか」

「まあ、いや確かに胡散臭いしさ、餓鬼っぽいと言うかナンというか、ンな感じだけださ」

「なあーにー、ほんじゃサンは、そんなン気にするの？」

「山田の自殺を聞いたらさ、あながちな、世紀末も近いかも、とか、不安になる俺ってかなりの小心者のような気がするけど」

「気にしすぎだよ」

「まあな、自分でも気にしすぎてると思う」

そう言って彼は首と手をぱきはきと鳴らし、大きく背伸びをするとも一回申し訳なさそうな顔で振り返った。

「ワリ、ンじゃやか」

向き直った顔はいつもの明るい本城さんだった。

「おう、やるやる、で、何やる？ てか何ある？」

「何かある」

「タイトルは？」

「んえーと…… COMBAT - HIGH、あとヴァルハラサーガ3

……」

「あつ原サガあるの！ 3!？」

「出たみたいだな、3」

「んじゃ、ファンタジろう」

「ん、ファンタジるか？」

「今日はファンタジりたいカンジ、夢と魔法を感じたい」

「おーけ、じゃあそうすつか」

と彼は喋りながらもゲームインストールを始め、その進行度合いが白い空間に青いゲージで表示される。

そのゲージの下には作業時間が表示されソコには残り約15分とまだまだ結構あるみたい。

簡単なゲームのインフォメーションが同時に流されて、ゲームの簡単な内容や、その操作などを説明するが、同時にその多くはネットワーク利用の上の注意ばかりであり、なんだか結構退屈だった。

「ねえ」

「何」

「ふと思ったんだケド、29文ってナンで2943なの？」

「知らん、いや全く知らないワケじゃないけど確かなことは分からん」

「へえ、ナンとか説きたいな」

「そうみたいな。はじめの警告文が2月9日の4時3分に出されたからツテのが有力らしいよ」

「へえ」

「後はニクシミて語呂合わせで読んだりとか、まあ、誰がともなく呼び始めたモンだからなあ、正式名称つてワケでもないし、答えなんて無いのかもしれないけどよ」。結局今では略されちゃって2943すら知らないで使ってる人も多いしな」

「まあネット用語なんてそんなもんですかねー」

そうして視線をゲージに戻せば残り作業時間は13分。

電車を待っているときとかそうだけど、待つ時間を指定されると余計にソレが長く感じるのは気のせいだろうか。

「うばば、長いね」

「今さっき始めたばかりだろうが」

「いや、そうだケド、ケードーさあーっ」

「まあ、解るけど」

「うへへ、でもそんなこと言いつつ実はこのおあずけ感が一番楽しかったりするのだけどね」

「まあ、それも解るな、うん」

私たちは初期設定を済ませ、ファンタジーゲームの世界へと入り込む。

舞台はヨーロッパ的な城下町。

石畳の質感や城下町の慌ただしい空気までもがリアルに再現されたこの世界は、私の興奮をよりいっそうのモノとさせていく。

「ちよリアルだねへー」

「だなあー、正直実際に見たらもっとカクカクしてるかと思ってた」

「あたしも、もっとポリゴンポリゴンしてるかと思ってたよ」

そして私は自分の衣装に手を伸ばし、その感触を確かめる。

ファンタジーだからなのか、それともビギナーだからなのか、そ

の質感は決して良い物ではなかったけど、それはそう、紛れもない布の物だった。

「うん、安っぽいけど、ピッタリ」

「ビキニアーマーは止めたの？」

「ビキニアーマーは未来の旦那さんのためにとっておく」

「いや、何と結婚する気だよ」

「ソイツは乙女の秘密でござる、と言うか」

「と言うか？」

「私は結婚するんでスカね？」

「知らんて」

城下町には既に沢山の人がいて、それぞれが異なる服装で、異なる顔をしている。

まったく違うのだけど、何故か私にはそれが新宿の駅前のような、ある種身近な物に感じられてしまう。

それはそう、きっと有る程度の人間臭さみたいなモノまで、この仮想空間では感じられるからだと思う。

そう思うと、ちょっとばかり夢のようなゲームも冷めて見える気がした。

「そだ、ウメ」

「なんスか？」

「フレンド登録」

「おお、よろしくッス」

「んー」

「んおー？」

「……あーあは、いや、何か実感わかないと思ってなあー」

「んふふ、わたしも、コレが本当にゲームなのかってカンジ、モロに中世のお城だから解るけど、コレがどこぞの摩天楼だったら私にはその判別はつかないかも知んない」

私は自分の頬をつねった。

鈍くて鋭い痛みがビキビキと、その後もじんわりと痛みが残る。

夢みたいなんだけど、これは絶対に夢じゃない。

そうなると痛い夢ならどうやって夢か判別するんだろう、自分が夢を見ているコトにも気づかないんじゃないだろうか？

それって結構怖いかも知れない。

「まあ、ダイジョブだって」

「……何が？」

「いや、別に、あーでー、どうする？　一緒に行くか？」

「いや……イヤヤ」

「いいの？」

「ん、今日は、イヤヤ」

「そつか……じゃー、あーじゃー、えー2時間、2時間たったら口ビーで集合」

「了解でっす」

「あ、それから」

「ん？」

「何か体調悪く感じたりしたら、すぐ首筋のトランスミッターはがして」

「ん、解った。そのままはがしちゃえばいいんだね」

「おう、そんで良いと思う、そんじゃ」

と、彼は手を振りながら去っていく。

私もちよちよと手を振って、彼の後ろ姿が見えなくなるまでソコに突っ立っていた。

「あーやーしかなあ」

正直なところナンで一人でやると言ったのか解らないのだが。

「うおー、なんつーかどしたらいいんだ？」

魔法剣士小梅、初っ端から路頭に迷い気味です。

仕方ないので私は街を出た。

よくある感じのサラッとした平地にはやっぱり有る程度の人がワラワラと群れていて、ナンというか中世ファンタジーな緊張感はない。

く、適当に談笑している連中が多い。

単独行動なんかしないで私もアイツと一緒にいた方が良かった気がする、自慢ではないが私は見ず知らずの人と話せるほど社交的な生き物ではなく、ましてやモニター越しですら無いのだから、緊張感はよりいっそうだった。

「おぼぼ、まいってきたな、寂しいぜこれ」

なーんてひとりごちていても状況は変わるわけもなく、どんなに寂しそうにしても誰かが向こうから話しかけてくるわけでもない。

ソナなことは解ってはいるのだけれど、ソレでも何か、私は世間の優しさを試しているんだー、的な何かで、私は強情にも一人しょぼんと座り込んでいた。

「うだーあ畜生、ゲームの中でまでっ、何ヤツてんだコンチクショウ」

その場に転がっていた石ころを投げ飛ばし、遠くの草むらへと消えていくのを眺めていた。

そんな姿を見てなにやらカップルみたいな二人組が笑っていて、私は恥ずかしいやら腹が立つやらでやってられないと言う感じ。

「くそ、カップルむかつく、死ね」

いや、まあ、正直に言ってしまうえば腹がたつのドウコウよりも、寂しさと怖さの方が強かったりする。

見ず知らずの街を歩くよりも、それはよりいっそう怖く、考えてみれば当然で、いくらゲームでアレ、自分の身体で何処へと知らない土地を冒険など出来るものか。

そうして万策尽きた私は、ねっとりとしたため息を1つついて、何をするでもなく物思いに耽るほかナイのだった。

そう言えば昔まおが言っていた。

人間独りでいるときはそんなに寂しくはないのだって。

人間が一番寂しいのは多くの人間に囲まれているとき。

都心の交差点。駅のホーム。休み時間の教室。

そんな山のように人がいる中で、人は寂しくなって、人恋しくな

る。

彼女は本の受け売りだと言って笑いながらに話してくれたけど、確かに私はこの上なく寂しい。

世界にはコレだけ人間がいるのに、すぐ触れられる距離に人がいるのに。

まるで見えない壁が人々を区切っているように、人と人の距離はそう近くはない。

そうやったまま私も私で自分の区切りの中に閉じこもり、個人は疎か、コミュニティーの壁にさえ触れることもできなかった。

はじめのウチは意地を張っていた私も、だんだんと興が削がれ、と言うか一種の諦めや飽きが混じり始める。

座っているのも心がギスギスするので、草原へと寝転がり、空を見て、何事かを考えるでもなく、ひたすらぼーっとすることに努めることにした。

道行く人々が時々何事かをつぶやいているように聞こえるけど、そんなことはナンかもはやドウでも良くなっていて。

実にフリーダムなカンジに野原に転がり、夏のソレとは異なる穏やかな風に包まれ、ある種の清々しさを身体に受けて私は大きく深呼吸をする。

太陽光は七色に拡散し、淡いハレーションとして私の視界を彩る、草木をゆらす風の音も、その自然ならではの重なり合った重厚感の波が、私の身体へ寄せて返してを繰り返している。

ソレは私だけの私のコミュニティー。

ソレは多分、今この瞬間、私が最も尊ぶモノ。

「あー……………そっか」

そうして私は、今この瞬間人類なんていなくなればいい、とか思っていることに気付く。

煩わしいモノなんて全て無くていい。

お互いがお互いに壁を設けるなら、壁の向こうなんて必要ない。そっちの方が楽だし、そっちの方が傷つかない。

すこぶる頭の悪い考えなのは解るけど、それが一番簡単な気がするし、それが一番妥当な気がした。

「だからさ、だからさ」

人は独りでは生きていけない、人は独りで生きなきゃいけない。そんなこと考え、決めることなんてナンセンス。

今を生きるために必要なことは、今を生きるのに必要な選択だけ。

ならば私は今を生きるために、この世の多くを否定することもいとわないし、必要と思えばその全てを利用するつもりでイルのだろ
う。

だから、今は、ウザイ、五月蠅い、煩わしい、邪魔。

今が気持ちよければそれで良い、ソレを邪魔する人類種なんて、今この時は独り残らず死滅すればいい。

怒るのではない、殺すでもない、関心を失い、興味を削ぎ、意識せず、その存在を内から消していく。

感知しなければそれで良いのだ、誰もがソレを理解しなければ、ソレはこの世には存在しないのだから。

だから私はそうやって、どんなモノだって消すことが出来るのだ。

「おーい、小梅？」

「ん……………」

見上げると、ソコには本城の顔があった。

呆れたようにニヤケながら、私のことを見下ろしている。

「何寝てンだよ」

「やや、寝てナイっすよ？」

「寝てたよ、いや、別に寝ててもナンでも良いけどサ」

そう言つと彼もドテンと横になり、私の側に寝転がった。

「今さ、もう少して何か悟れそうだったんだよ」

「だから、寝てただろっに」

「ソレをぶち壊しやがって」

「お前の悟るモノなんて他の誰かがとつくに悟ってるよ」

「……」

「なした？」

「んーあー、そうかもしんねーっ、なんか自信なくなってきました」
「べつに変な自信つけんでもイイって」

「そうかなー？」

「そうだろ」

「わかった、そうかもしんない」

「ん、それでいい」

そうして彼は両手を前につきだして、太陽に透かし目を細めた。

「空、綺麗だな」

「だねー」

「空見るのなんて久々な気がするよ」

「うはは、何時も頭の上にあるのにねー」

「あーでー、どだった、ゲーム」

「寝てたからあんま分かんない」

「そか、まあ、そんでもいいか」

「いーんじゃないでしょーかー」

そして私は跳ね起きて、身体についた土草をパツパと払いのける。
久々に起きあがったせいで頭が重く、ぐらりと大きく立ちくらみをした。

「どわーっふ」

思いつきり背筋を伸ばし、全身で日の光を浴びてついでに大きな
アクビも1つ。

「じゃあそろそろ落ちるか」

「そうする？」

ログアウトする前に私はもう一回だけ空を見て、城下町の城壁を
見て、野原の先を見て、周りの人たちを見て、そして本城を見た。

「あー」

「何？」

「きつちりレベル上がったるし」

「ちゃんとゲームしてたからな」

「むう、今度は一緒にやるべ？」

「おうおう、それじゃ落ちるぞ」

「あつ」

そうして次の瞬間には、私たちの視界は真っ白な空間へ戻っていて、初めて入ったときのようなドキドキ感はまだ何処にもナイ。

残っていたのは心地よい脱力感と、良く解らない達成感。

体感ゲームつてのは思った以上にインドア派には向かないのかも知れない。

「なした？」

「いや、別に、まあ、1つ解ったよ」

「なにが？」

「ゲームをやってる事もまた現実なり」

「ふーん」

「むが、さては意味解ってないな？」

「ふん、まあな」

「んー……まあいいか」

「いいならいいや」

「うん、まあいい」

そうして私は込み上げてくる笑いを押さえ込んだ。

「ねえ、私さ、まあと結婚するわ」

「へえ」

「まおに毎朝おみそ汁つくってもらって、まあと毎晩イチャイチャするよ」

「どーしてまた？」

「そりゃーもう」

「もう？」

「私の周りの男は優しくないし、気が利かないし、役に立たないの

ばっかりだからね」

心底がっかりする本城を見て、私はなにやらしてやったり気分。自分で言うのも何だけど、結構嫌な女だとは思う。

その日の帰り道、何処か遠くでセミの鳴く声が聞こえた。

だけどソレは盛る夏を彩るためのモノではなく、変わりゆく季節を惜しむようなモノに私には聞こえる。

指の隙間から砂がこぼれ落ちるように、何かが確実に、だけど少しずつ失われてゆく。

ソレが何かに気付く頃には、全てはもう手遅れなのではないかという不安が、私の心を焦らせ、シメ付けていた。

ゲームの中で心地よい風に当たっていたせいか、夜風であっても夏特有のムシつとした感覚は身体に重たく感じる。

さつさと家に帰ろうと脚を早めていた私だったが。

団地にさしかかったところで、私は半ば無意識的にその階段を上っていた。

あの日以来、私はこの場所へは来たことはなく、それは、もう、自殺ごつこの必要もなく、ココに独りで来ることにさして意味がなかったから。

だけど今日は、何だか無性にあそこへ行きたい。

何でだろうか、一刻も早くソコに広がる景色を見たい。

そうして私は、カンカンカン、一気に赤い非常階段を上りきり、ソコに広がる景色に目を見開いた。

「あはは、真っ暗じゃん……」

分かり切ってはいた、日はとうに沈み、いまでは街の光りだけがぼつりぼつりと輝いている。

七色に輝くその光りは綺麗だけど、なんでだろうか夜風に乗って私の心の隙間へと冷たく流れ込んでくる気がした。

「真っ暗だって……」

やっぱり私は寂しいんだ。

夕日が見たかったのは、やっぱり私は寂しかったからだ。

ソレも叶わなかった今となっては、私の目の前に広がるのは暗闇だけだった。

「私だって、真っ暗だあ！」

高校二年の夏。

春川小梅は沢山の暖かい人たちに囲まれて、この上なく寂しかった。

ハルカワコウメ

私とその男と会ったのは高校に入った始めの年、その年の夏だった。

どことなくいい加減で、どことなく不精っぽく。
とらえ所がナイ、そんな印象が強かった。

出会った当初は、まさかこんなに長い付き合いになるとは思っ
てなかったし、それは相手もそうだっただろう。

だけど、しかし、彼と会っていなかった人生は、また違ったモノ
になっていたと思うし、そもそも彼に出会えなかったら私は今生き
ていないかもしれない。

ちなみに言っておくとそれは彼氏とかそういったモノではなくて、
ソコには別に世間が喜ぶようなラブロマンスも、そして儚い純愛も
転がっていたりはしない。

それでもまあ、彼が私の好みかというのならば、それは100%
好みだといえるのだけど。

「んえ、じゃあ姉さん今日帰ってくるの？」

私はソファーに寝転がりながらカップアイスを引っかけ回し、ゲ
ーム機と格闘する父の背中と話していた。

「おお、さっき電話有った、あつ、ちょー、何も当日に電話せんで
も良いのに、ぐわーっ」

「だは、パパ後ろだよ、敵いるよ、敵」

「うおっ、ムリムリムリ！　だはーんっ」

爆音が響き渡り、赤黒いゲームオーバー画面がテレビに広がる。

父は変な声を上げて床へと突っ伏し、ムリっ！　と両手をクロス
してx印を作る。

「最近のゲームはアレだね、難しいよ。速いし綺麗だけど、身体が
追いつかないや」

「ですかー、まあこれそんな最新でもないケド」

「んー、パス、小梅の番、アイツやつつけて、あの黒くて速いの」
「おう、まっかされおー」

と、私がコントローラーを握ったところで、父はこめかみに指を当てて慌てて私を制止する。

「あータンマ、ちよい待った」

「何？」

「ちよつと小梅、お使い頼まれてくれる？」

「ヤダ」

「じゃあケーキ買ってきてよ、桜も帰ってくるしさ、ちよつとしたお祝いで」

「ラジャ、解った了解した」

父は財布を探してウロウロと、私は外へ出れるような格好に着替えるために自室へと向かう。

寝巻きを脱ぎ捨て、ブルージーンズをはいて、真っ白なシャツを羽織り、日差し避けにキャップを被る。

日頃からあんまり服装には気を使わない方だけど、夏休みとなるとソレも酷い状態となり、何だか気付けば昨日も今日も同じ様な格好をしている気がした。

帰ってくる姉さん、姉の桜は今年で大学三年生となるらしい。

都心の大学に通うために独り暮らしをしているけれど、不甲斐ない私らが切り盛りする家をほっとけないのか、それとも若干のホームシックなのか、こういった長期休暇以外にもちよくちよく帰ってくることがあった。

だからまあ、そんないちいち祝うほどのコトじゃないのだけれど、父も娘に会えることが嬉しいんじゃないだろうか、しかたのないコトとも思っけど相変わらず子離れしない男である。

「何処が良い？」

「あーつとなー、駅前に山田屋のチェーン店出来たら、あそこ美味しいよ」

「ナンで解るの、パパ食べたの」

「パパ食べてないヨ？ 友達が食べて美味しかったって言ってたヨ」
「そっか、えーと、あとはー、何買う？」

「パパはモンブランが好き、桜は何好きだったっけ？」

「あー、あれだ、ミルフィーユみたいなのスキだ、多分」

「じゃあそれで行こう」

「母さんののは？」

「あー、だはは、まあ、そうか、でもなー母さん甘いのニガテだったしなあ、結局最後は小梅がもらう気なんだろう？」

「勿論そのつもりです」

「んーまあ、解ったよ、じゃあフルーツ乗ってるの何か買うと良いよ、アイツ果物は好きだから」

「うん」

「後ゴメン、パパ嘘ついた」

「ん？」

「あそこの店、普通に美味しいよ」

「あ、うん、いや、知ってる」

駅とは言つけれど、無人駅ではないと言う程度の小さな駅であるそれは、当然ながら利用者も多いというわけではなく、周囲には駅ビルはおろか高い建物も見あたらない。

そんな中に建つ色鮮やかな洋菓子大手の山田屋チエーン店は、異彩を放っているというか、正直場違いな気がしなくてもなかった。買うモノを買ってさっさと帰ろう、店内のクーラーは恋しかったけど、あんまりゆっくりしていると姉さんが帰ってきてしまうかも知れない。

だけどそう言うときに限って、私は何かを呼び寄せてしまうわけで、そう言うときはきつとなにかそう言う類の運の悪さというか、もはや呪いか何かを受けてるんじゃないかと思う。

「あー、スイマセン」

との声が後ろから、この時点であー、みたいな何か嫌な感じというか、道を聞かれるオーラみたいなを感じ、眉をひそめる私。

その次ぎに何を言われるか、そんなことを頭の中で考えつつ、振り向いたソコにいたのはチヨボチヨボとシヨボイ無精髭を生やした汚いお兄さん、と言うかオジサン入り口、年齢的には25〜35の間ぐらいに見える。

まあにはよく「えー」と引かれるのだが、私はこういうオッサンが非常に好みのラインだったりして、そんなこんなでついついトキメキメーターが振れながらも、私は「ナンでしょうか？」と落ち着いて対応。

トキメキが漏れだしてないか、正直なところ不安だった。

「あー、とですね、キミは中学生、高校生？ いや、違う、あれだ、綾川第三高校って解るかな、ここら辺に有るんだけど」

「え、あれ、ウチですか？」

「ウチって、あーじゃ、もしかしてアヤ校生？」

「はい、現役バリバリの女子高生です」

「その、申し訳ないんだけどさ、良ければ道を教えてくれないかな、迷っちゃって、いや、迷う道じゃないんだけどねえ……」

「はあ……ああ、じゃあ、なら一緒にいきます？ 案内しましょうか？」

とかまあゲンキンなモノだ。

さっきの嫌な感じは何処へやら、相手を選んでみずから道案内を名乗り出ている自分に多少嫌気がささないこともなかった。

「あれ、良いの？ あー、じゃお願いしようかな」

「はい、まあここからなら歩いていける距離ナンですぐにつきますよ」

自分なりの可愛い笑顔をそえて、私は久々に夏休みの高校へと足を向けた。

ケーキの方はまあ、ドライアイスも入ってるし大丈夫だろう。

「アヤ校に何かご用なんですか？」

あまり品のないこととは思いますが、道すがらずっと黙っているのもナンなので、私はとっつきやすそうな話題を問いかけてみた。

「ん、まあ、下見かな」

「下見？」

「ん、後学期からアヤ校で生徒指導って言うかな、そーゆーのをすることになってね」

「うげ、生徒指導……？」

「んあ、まあ、俺はカウンセラーだからなあ、スクールカウンセラーだよ、悩めるアヤ校生達に救いの手をさしのべるためにナンチャラとね」

「へえ、へー……」

「見えない、やっぱり？」

「はあ、失礼ですけど、あんまり……」

「コレでも一応臨床心理士の資格は持つてるんだけどね、まあ、根が不真面目だから。やっぱり人の精神を看る人ってのは、小綺麗な印象が強いのかもね」

「臨床心理士？」

「あーとだな、えー、臨床心理士ってのは……」

「あ、いや、やっぱり良いです。そゆコトは自分で調べますんで」

「そう？」

「まあ、はい、インターネット繋げてるんで、コンタクトも今入れてるし」

「ああ、そう言うコトか」

男は少し苦笑いをして、歩きながらは危ないから、とまた時間があるときに調べてくれるよう言った。

通りの突き当たりを曲がればソコはもう学校なのだけど、何だかちよっと着くのが惜しいような、そんな気がしてしまう。

「それって、耳たぶに何か入れンでしょ？ 受信機？ 何か気持ち

悪くないの」

「いや、手術もナイですし、専門店行けば1分もかからずに入れてくれるって言いますけどね。私は、これ、イヤリングなんで、実際にやったことはないんですけど」

と、私は耳に通したB B弾ほどの耳飾りを示す。

「あ、そなんだ」

「先生は繋げてないんですか？」

「んー、まあ、俺は根っからのアナログ主義者だからねえ、ネットだってパソコン有れば十分だし、なんか身体がウケつけないっちゃうか、まあ、携帯だってなかなか持ちたがらなかったぐらいだからなあ」

「へえ、今時」

「珍しい？」

「はい……あ、ソコ右です。すぐソコ、もう見えます」

「ああ、ホントだ。いや、アリガトね、助かったよ」

校門くぐりこちらにちよっと手を振った先生は、グラウンドを通り校舎の方へと向かっていく。

ああ、なんかこう、勿体ない。

ナンというか、あの人ともっと喋りたいと、私はどうしてもその場を離れることが出来ない。

「せーんせー！」

「ん、どしたー？」

「コレからドウするんでーすかア？」

「んー、ちよっと先生達に挨拶して、手続きとか確認して、でー、ちよっとカウンセリング室とか見て、そんなモンだと思う」

「ですかー」

「あ、なに、一緒に来る？」

「いいえー」

「そーう」

「あー、あとーっ！」

「何？」

「グラウンドは革靴厳禁です」

「ああ、コリヤ失礼したっ」

先生は笑っていて、そのおちゃらけた態度に、私もつられて笑いがこぼれる。

何処かで会ったことがあるような人だと思つたら、なんか父に似ているんだと、私は独り納得していた。

顔こそは全然似てないんだけど、気づかいにも似た場の空気を気にする姿勢は父とそっくりだ。

そう言う意味では私は結構いい人を見分ける目があるのかも、と言うか私が本格的に筋金入りのファザコンなだけかも知れないが。

校庭に一人残された私は、ちよつとだけ変な満足感に浸っていた。

「あつれ、なんだまだいたのっ？」

そんな驚きの声は、用事を終えた先生が校門に寄りかかっている私を見つけたときの声だった。

結局私はその場で先生を待っていて、ソレは別にドウシヨウというわけではないのだけれど、ドウもしないのも何かであったワケで、とどのつまりドウしたらいいかは考え中だったりする。

ドライアイスが冷たいウチはココで待っていようと思っていたけど、ソレが溶けきるよりも前に先生は現れた。

だったらこれは、何かのチャンスなんだと思う。

だったらナンのだ？

「先生！」

「なあ……何？」

「じゃあ、カウンセリングしましょう！」

「じゃあつて……てか誰を？」

「私を」

「うはは」

「だあ、つちよ、何がオカシイ」

「あーいや、ゴメンゴメン、でもヤダ、先生今日休みだし」
「うえー」

「まあまあ、折角待つてくれてたんだし、お茶でも出すよ」

「ああ、ん、まあ……はい」

「それにー」

「なんですか？」

「そのままじゃソレも悪くなっちゃうしね」

と、ケーキの袋を指され何故か赤面する私だった。

「そう言えば名前は？」

私と先生はカウンセリング室へと上がり込み、そのソファーへと腰掛ける。

生活力とかあんまりなさそうに見える先生だったけど、ポットからお茶を淹れる手つきはそれなり以上に慣れている感じで、独り暮らしが長かったのかと勝手な想像を膨らませる私。

「小梅です。春川小梅」

「へえ、まさに春な名前。あー俺は牛久久夫、改めて今後もよろしく」

「あ、はあ宜しくお願いします」

「変な名前だろ？」

「ですか？」

「あ、そうか、動物の牛に、久々の久、で牛久。さらに久々の久と、夫の夫で久夫」

「あー、そりゃヘンだ」

「だろ？」

「親はオカシイと思わなかったんですか？ ジョーク？」

「ああ、んー、まあソレには色々とあつてだなア、まあ、ナンというか未婚者なのに途中で苗字が変わったりしたわけで、ああ、別にソレは気にしないで良いんだが、ん、まあそういうことなんだ」

「ああ、あーっ、あーいや」

「だからいいって」

「あー、はい」

私はお茶を一口含み、のどの奥へと流し込む。

そう言えば校庭で待っていたのだ、喉はカラカラに乾いているのに、自分ではあまり意識することはなかった。

「で、何をドウするんですか？」

「あーんーお茶はおかわりいる？」

「あ、ください」

「アレだ、申し訳ないんだけどさ」

「はあ」

「俺のカウンセリングしてくれない？」

「はあ？」

思わず変な声がこぼれた。

カウンセリングの先生が素人な私にカウンセリングしてくれと言うのだからそりゃ仕方ないと思う。

すると先生は冗談めいた口調で、悪い悪い、と言いながら、姿勢を直して話を続ける。

「あー、いや、俺もワリと新米でさ高校生のスクールカウンセリングは初めてナンだね、正直怖いんだよね高校生とか」

「ああ、そゆことですか」

「いや、なに、あれだー、不良とかって多いのこの学校は？」

「どですかねー、ややまあ、不良はカウンセリングとか来ないと思いますけど」

「ああ、まあ、それもそうかな」

「そうですよ、多分」

「うーん」

「先生？」

「あー、デモなんかやだな」

「だはあ、も、せーんせー」

「あ、んー、悪い、悪い」

何だかグダグダとしていて、黙ってれば男らしいの力も知れないけど、喋ってみれば結構女々しかったりした。

まあね、最近はキレる子供も多いしね。

「やあ、もう悪いっ、この話は止めよう、暗いし……何より俺が格好悪い」

「あはは」

「そうだ、部活とかは？　キミは何入ってんの？」

「美術部ッす」

「あ、絵とか上手いんだ」

「いえ、全然」

「あれ？　そうなん？」

「そうなんです、ナンデかももう不思議なほどに」

「そか、あー、じゃ友達は？」

「いますよ、結構」

「んー」

「も、なんですかあー」

何処をついても思ったような返事が返って来ないっていうか。

何処から行っても芳しくない反応というか。

なんだか正直、煮えたぎらない。

「牛久先生」

「何？」

私は意を決してというか、半ば反射的に立ち上がる。

「いや、大変申し訳ないんですけど、お話がグダグダ過ぎます」

「あー」

「あ、スイマセン」

「いや、良いけど、スゲーな、ストレートだなあ、えぐるような」

「多分」

「たぶん？」

「性格です」

「かあ」

「や、嘘です。嘘つきました」

「んー」

そうして先生は少し頭を抱えてうなり声を上げた後、そうだなあと、言葉を選びつつ部屋の中を視線がきよきよと舞う。

私も言いたいことは色々あれど、何か言おうとしている前で何か言うのはやっぱり失礼だと思うし、なら言わないのが一番だと思う。「あー、あー、あれだ、先生は、違う俺は、最近先生としてしか若い子と話してないから、正直何話したらいいのか分かんないし、なんかね、凄く緊張してます。照れてます」

「おお」

「ヤダね、コレって恋かしら」

「だはは、うはは」

「そもそもアレだな、誘ったのが間違いだった。別に俺は昨日のテレビ見た？ とかそう言うどうでも良いトークに長けてるワケじゃないし、ならアレだよな、正直つまないことしか話せないかも知れない」

「どうします？」

なんて言う私は笑顔だったかも知れない、ヤナ女。

「解散しようか」

「私はモウチヨイいますけど」

「うえー、意地悪ー」

「うへへ」

「どうしたいの？」

先生はちよつと首をかしげるように、視線を合わせて私に問いかける。

「じゃあ、あー、じゃああれです。道案内のご褒美」

「何？」

「“先生と” お話じゃなくて、“私と” お話してください」

「だはは、成る程」

「うひひ」

「だはは」

「大体アレですよ、子供が少なすぎるんですよ、もつと産みまくらないと、公園行っても誰もいないですもん、ゴーストタウンかつ、という話で」

気付くと時計まもなく5時と言うところ、夏も後半に近づき、日もだんだんと短くなってきた。

教室の窓ガラスからは茜色の光りが流れ込み、それは部屋の中にほんのりと暖かいヴェールをかけたよう。

空調のかかった涼しい部屋でのその暖かい光りは、私の中での感覚を若干ながらちぐはぐにさせるような、そんな光りでもあった。

「だから、俺はアレだ、山田総理の就任には反対だったって」

「あれ、その話？」

「じゃなかったの？ 山田が首相になってから、出生率が大きく落ちたって言う、ソーユー問題にあんま無関心だったからなあの人」

「ああ、ソコに繋がるんだ」

「ん、まあ、でもさ、正直ソーユー話の答えッテのは何時も同じかもな」

「何です？」

「そんなことドーでも良い」

「あはは」

「政治は、興味ない。国際情勢は、関係ない。宗教は？」

「キモイ？」

「ソレだ」

「環境は、ダサイ」

「平和は格好悪い、ってか」

「むふ」

私は込み上げた笑いを押さえ込んで、ブサイクに口から息を吹き

出す。

おいおいどうした、と、先生はこちらの顔をうかがうように視線を合わせた。

「やはは、いや、なんか先生もなんか、饒舌になってきましたねえ」
なんて、まくし立てたりする。

「や、俺もトークセンスはないけど結構おしゃべりな方よ？ 上手くないし、ちょうど良い相手がいなかったただけだよ」

「ハイハイ、先生彼女とかいないの？」

「残念ながら募集中で」

「うひひ」

「あれー、俺、高校生ってスゲー苦手なんだけどなあー、キミは変わったヤツだよ、んー」

そう言う先生には少し影が降りたような気がして、私は次の言葉を続けることは出来なかった。

一転して降下したテンションに多少の焦りは感じつつも、そうしてそっと、先生の顔をうかがうようにして、そしてちょっとだけ、つついてみた。

「先生、何かあつたんですか？」

「んー、まあ、な」

「ふーん」

「……」

「……」

「話さないよ？」

「話したいんじゃないんですか？」

「ん、話したいけどね、誰にも話したこと無いし、ただ」

「ただ？」

「いや、聞いたら引き返せないよ、みたいな感じ」

私は噴き出した。

コレが本心からの笑いだったのか、それとも意図的な笑いだったのか、今となっては覚えていないけれど。

ナンというか笑ってやれと言う感じ。

そんな様子を先生はとても複雑そうな顔で眺めていた。

「良いですよ」

「何が？」

「引き返しませんから」

「あはは」

「ナンですか？」

「やや、ゴメン、冗談だつて、冗談、そんなヤバイ話じゃない」

「そなんですか？」

「まあ、ねえ、俺がナンでこの話をしてナイのかつて言うと、まあ、確かに色々とし訳ないとは思っているし、何より自分が情けなくなつちやうからであつて、ん、まあそう言うコトなんだ」

「はあ……」

沈黙が流れて、遠くの方からセミの鳴く声が聞こえた。

茜色に乗せたその声は、いつもよりずっと、寂しく聞こえる。

「で、聞くの？ 俺のとおつておきの話」

「あ………はい」

「ん、まあ、端的に言つと、俺は唯一無二とも言えるような友人を高校生共に殺されたんだ」

「結構ヘビーですね」

「そんでもつて、結果的に言えば俺はその共犯だつた」

「それ……結構ヤバイんじゃないですか……？」

そうして先生は席を立ち、こちらに背を向けて窓の外を見る。

夕日が逆光となり、先生の輪郭が輝きを放つ。

「いや、まあ、あれだ、別に実際に殺したワケじゃないし、一種の自己嫌悪の類だからソコはあんまり気にしないで良い。まあ、逆恨みだよ、確かに原因を突き詰めれば高校生共が悪いんだが、俺は結局アイツに何もしてやれなかったことを悔やんでいて、ソンでもつてバカなガキどもを見ているとソレを思い出して、そして腹が立つて、まあ、そんなモンだ」

「何があつたんですか？」

「ソイツは自殺したんだ。そして俺はアイツを救えなかった」

「助けるってコト？」

「違う、アイツを救うためには、俺も一緒に死ぬ必要があつた」

「それじゃ……」

「約束したんだよ」

「あ、ひつ……ちよつ、と、待つ」

「俺はアイツに、自殺するときは一緒だつて、約束していたんだ」

私の胸が、音を立てる程に痛むのが聞こえた。

それは軋み、ギチギチと歪な音を立てて私を蝕んでいく。

先生とその友人は、小学校時代からの付き合いだったそうで、言ってみれば幼なじみに近いような間柄。

家も近くにあり、お互いが違う高校、大学へと進んでも、その間系は途切れることはなかった。

「そうだな、アイツは教師になりたがつてた。もともと人に教えることが好きな奴だったし、自分の大切だと思ふこととか、そう言つたことを教えたいとも言つていた。どこぞのB組を作りたかつたんだとよ」

そうしてお互いが違う道に向かつて、それでも何となく相手のコトを気遣つて、そして二人はお互いの夢に向かつて青春を突つ走つたそうだ。

「……その約束は、イツしたんですか？」

「ちようど……大学4年の時だったかな、教育実習から帰つてきたときアイツ完璧に自信喪失してな、もとから俺とは違つて繊細なヤツだったし、失敗とかにも慣れて無かつたんだらうケドよ」

「ソレでも、教師になつたんですか」

「なったよ、俺がならせた。ケツひっぱたいで、ちよつと熱くてクサイコト言つて。そしたらアイツはなった。ソんで死ンじまった」

先生の友人が赴任した学校は、決して不良のたむろする学校など

ではなく、逆に進学校、将来のエリート生み出すような、そう言った学校だった。

だけどその人は殺された、自殺するようにと、ゆっくりと弱らせられていった。

「アイツは、そこまで言うなら俺も絶対教師になってやる、ッて言つて、ソレでもダメだったら、お前俺と一緒に死んでくれるのか？　ってそう言ってきたんだ」

「良いって言ったの？」

「言った、勿論だ、とか言った」

「本心で？」

「若干、本心だったけど、まさかな」

ある日、その友人から電話が来た。

友人は自分の置かれている状況、心境、自分が自律神経失調症になったこと、今は休職状態であること等を言い、そして最後に「約束果たしてくれ」って、そう言ったんだって。

「その時になって、俺は初めて怖くなってさ、大学の屋上で待ち合わせつて、アイツのコトバがグルグルと頭の中で回ってた。何か立ち上がるのも怖くて、身体が寒くて、毛布にくるまって部屋の隅で俺は泣いてた。恥ずかしい話だケドな」

「それで……どうなったんですか？」

「次の日、アイツの通ってた大学で」

「やっぱりいいです。ゴメンナサイ」

「……………自殺体が見つかった」

私は顔を伏せた、涙が出てくるのが解った。

そして、自殺した顔も知らぬ先生の友人と、自分の友人を一瞬でも被らせてしまった自分を、殺してやりたくなった。

「先生の……夢って？」

そしたら先生は両手を上げて。

「病める現代のコドモたちを、その病理から救うことだ！」
と、叫び。

「最も、アイツが死んだ時から、俺の救いたい相手なんていなくなっちゃったわけだが」

そして肩を落とした。

「ダア、コンチクショウめツ、コレで大体の話はお終いだ。どだ、面白かったかっ？」

なんて皮肉めいたことを言う。

勿論私には、この皮肉が誰に向けて添えられていたモノか知っていたし。

知っていたからこそ、私はちょっと微笑んで、そうして後は誤魔化した。

「ねえ、先生？」

「なんよ？」

「私もさ、しちゃったんだ」

「何を？」

「約束」

「そか………」

「私まだ、死にたくないよ？」

「だろうな」

「先生、助けてよ」

「ムリだ」

「助けてよぉ……」

「俺には、出来ないって」

そして先生は、私の髪をくしゃっと撫でて、そして立つように促した。

「よし、今日のカウンセリングはコレでお終いだ。ケーキ持っさつさと家族んトコ帰れ」

「うん……」

「また来たかったら、また来い」

「うん……ありがとう」

そこまで言って、私はようやく気付いた。

先生は父に似ているのではなく、私に似ているのだと。

先生の生き方は、何処か私のソレと似ている。

そして先生の歩んできた道は、いずれ自分の道と重なるのではないかという不安が私の心の中を支配していた。

私には先生の苦しみがどことなく解る。

ソレはきつと、先生が躓きそして抗っているモノの正体は、私の敵と同じだからなのだと思う。

目に見えないはずのその敵、その痛みは、今となっては残酷なくらいに鮮明だった。

私は涙を拭いた。

荷物を持って「ありがとう御座いました」ソレだけを言って足早に部屋を出た。

だから私は、部屋に残っていた先生の涙を知らない。

「ただいまー」

「おかーえりー」

と、玄関に立つのは姉だった。

「あ、おかえり」

「んへへ、ただいまー」

「おそーい、何やってたんだ。あの黒いの倒しちゃったぞ？」

「あは、ゴメンゴメンちよつと話し込んでちゃって、ケーキはダイジヨブだよ、冷蔵庫に入れてたし、でーあー倒せたんだソレ？」

「ああ、パパの粘り勝ちだ。ざまみろってカンジだ」

「あはは、おめでとう」

そして、買ってきたケーキをテーブルの上に広げるのだけど、どうしたことかソコには既に先客がいる。

「あんれー？」

「どしたの？」

「あは、もしかするとケーキダブっちゃった？」

と、テーブルの上にはケーキが並んでいて、私は自分の買ってきたソレと見比べる。

「ああ、うん、でもでも安心せい、アタシのは山田屋のだから、東京の味ってヤツを思い知らせちゃる」

「うーん、ゴメン、こっちも山田屋だ……」

「うえー、あつれー……そんな予定ではなかったんだけどなあ……あは、こっちの方にもできたの？」

「うん、駅の真ん前に、気付かなかった？ あのパステルの建物」

「あー、うー、電車出た直後は半分以上寝てたからなあー」

「うへへ、まあいいさ、ケーキがあまって困ることもあるまい」

「まあね」

そう姉は笑いながら、ショートケーキのイチゴを一足先に頼張った。

「お」

「どした？」

「フルーツケーキ」

「ん、お母さんの分」

「わかってンじゃん」

「まあね」

そして私は二つのフルーツケーキを母の所へと持って行くのだった。

夏はもう、終盤にさしかかっている。

後一週間もすれば、秋の風と一緒に後学期が始まるだろう。

夏が終わったら私はあの部屋へと飛び込んで、そうして先生にあの日尋ねられなかったことを尋ねてみようと思う。

「先生は生き残って後悔してますか？」

先生はきつと困った顔をすると思う。

何かちよつと唸るかも知れないし、考え込んでしまつかも知れない。

どんな答えが返ってくるのかは解らないけど。

もし、先生が後悔していナイのであれば、ソレはきっと私にとっても掛け替えのない明るい光りとなってくれるはず。

ソレはまるであの日の夕焼けのように。

生きる私を支えるような、そんな光りとなってくれるハズ。

ハルカワコウメd（前書き）

若干ガールズラブ的な描写があります。苦手な方はご注意ください。

ハルカワコウメd

これは高校二年の時の話。

夏休みが始まる一ヶ月ほど前に、彼女は私たちの高校に転校してきた。

時期も時期だし、彼女の独特なキャラクターのおかげもあり、ソレはちよつとした話題性を持って私たちの中へと入り込んでくることとなる。

そんなこともあつてか、彼女がクラスになじむのはあつと言う間だったし。

クラスも彼女のことをナンの抵抗無く受け入れることが出来ていた。

確かに変ではあつたけど、その時はナンの変哲もない、タダの転校生と思っていた私たち。

今だから思うに彼女は、私たちに日常の終わり。

さらには日常的な非日常の到来を、伝えに来てくれたのかも知れない。

「えとお、転校生の和泉てんです。なんかむっちゃ中途半端な時期ですけど、どうかヨロシクお願いしますー」

「あー、えと、いずみ？ わいずみ？」

担任がちよつと申し訳なさそうに確認をとる。

「わいずみですー。やっぱり紛らわしいですよねえ」

と、作り物か自然か、ドウとも解らない笑顔。

「わいずみって読むのは珍しいね」

「ですよー」

私の印象はというと、変な女。その一言だった。

筆みたいの後頭部で束ねられた髪型もそうだし、その変なイントネーションもそう。

名前だっただいぶ変。

総括的にパツと見て変な女だった。

「あー、じゃあー何か質問とか会ったらー、答えますよー？」

「んあー、そゆのは後で生徒同士でやってくれるかな、ホームルームやつちやわなといけないから、今日は先生この後会議なんだ。申し訳ないけど」

「あー」

「ん、じゃあとりあえず、ソコの椅子座って話聞いてて、ホームルーム終わったら使ってない机出すからさ」

「了解しましたー」

なんて敬礼なんかやつちゃってノリノリな女。

アレは絶対浮くな、とか、心の中でひそひそと考える私も嫌なヤツだと思う。

ホームルームが終了した途端、彼女は新しもの好きな生徒達に囲まれていた。

質問あるか、なんて言わなくてもそうなっていたとは思うし、私がそれに混じっていないこともあらかじめ解っていること。

そんなワケでどうにも興味のわかない私は、机に突っ伏し、次の授業まで寝ていようかとそんなカンジ。

「小梅えー」

「むご？」

クラスメイトの一人が私を呼ぶ。

一体何かと振り向くとソコにはさっきの彼女と、それにまお、クラスメイト他数人が立っている。

「小梅って確か美術部だよね？」

「ん、そだよ、んぶー何、説明とか？ 部活の」

「まあ、そんなもん」

「じゃ、まおもか、演劇部だったっけ？」

「ん、そんなもんです」

「むー、えー、てんこさんだよね」

「あ、どうもあ、えーと、小梅ちゃん？」

「春川小梅です、まあ、宜しくね」

「ヨロシク」

「あー……………」

「どうしたの？」

「うがぁー、まあいいか、じゃあ放課後にでも…………あー」

「んう？」

「えーと、あれだ、んー」

「はあ……………」

「どうせなら、見学でもしてく？」

なんて目を擦りながら言ってしまうながらも、メンドクセーとか、安請け合いしたーとか、思っている私、嫌なヤツ。

今日はやたらと自己嫌悪が多い。

私が自己嫌悪する時ってのは、大抵普段無いようなことが起こったときであって。

ソレはツイツイいつも通りのルーチンデイズから外れたために、自然とそう言った毎日に戻ろうとするコトから産まれる心の働きのだ。

とどのつまり私のような平凡普通な毎日を退屈と言うような人間に限って、何かあるとすぐいつもの毎日に戻ろうとしてしまう。

ソレを認めてしまうのも何か嫌だから中途半端に自己嫌悪を深めてしまうのだった。

まあ、なのでいつそのこと、明るくノリノリな小梅さんで部活案内でもしてやろうかと、ちょっとばかり心に誓う今日の私。
慣れないことはあまりうまくはいかない。

「和泉てんこ、和泉てんこ」

私たちは放課後の教室で、彼女が来るのを待っている。

「和泉、てんこ、てんこ、和泉」

「どした、ナニソレ呪い？」

「てんこ、てんこ、てんこ」

「おーい？」

「アレだよ、イメージトレーニング」

「はあーまあよくわからんが頑張れ」

「ん」

そのてんこさんは、先生から受け取るモノがあるとのことでは先ほどから職員室へと行ってしまった。

どうにもなかなか帰ってこないの、私は机に座り足をバタバタ。絶対に浮くと思っていた彼女だけど、その立ち回りは随分とこなれたモノで、放課後の今までになんてコト無くクラスになじんでしまっていた。

なんだかちよつと面白くない気もするけれど、だからって別に彼女が嫌いというわけでもないの、ソレはソレで、コレはコレと言った感じ。

「やー、ゴメンなあ、先生色々ゆーんで遅くなっちゃったわ」

「あ、来た」

彼女は重そうなビニール袋を抱えて教室の扉をこじ開ける。

多分教科書か何かだと思っその大荷物は、机へと置かれドシンという音を立てた。

「よっしゃ、じゃ行こう！」

「おお、んー、美術部？ 演劇部？ どっち先見るの？ と言っかこのタイミングで入ってもあんまり活動できないとは思っけどね、来年はもう受験だし」

私よりかは大幅にできる女であるまおさんは、ソんな所にまで気を遣ってあげている。

受験という言葉など頭の隅にもなかった私も私だけど。

「んまあ、ダイジョブやよ」

「ダイジョブなの？」

「んー、まあ」

「何だよ？ ずいぶん余裕だな」

「まあー、んー、全国模試でも割と良い感じだしね、まあまあ
「志望校とかもう決まってる感じ？」

「んーまあ、まあそんな感じで」

そしてまあはちよつと、考え込み、そしてまあいいかといった感
じで顔を上げる。

「まあ、いつか、ソコあたりはお互い不干渉で」

「あはは、そりやどうも」

確かになんかおちゃらけてるけど要領は良さそうだとは思つ、ま
あでもなんか、そういうのってズルいとか、そう思っちゃう私は要
領が悪い。

「あ、で本題よ、本題」

「ああ、だね、ですな、どんな部活が良いの？」

と私は気を取り直して彼女へと問いかける。

「うーん、まあ、ナンだろね、ダラダラやるよりかはガツーンと活
動したいンよね、まあ運動部はヤなんやけど」

「スポーツはできないんだ？」

「いや、デキルよ？ 出来るンけどー、ま、アタシは根つからのイ
ンドア派だしね、体育会系のノリもあんま好きじゃないから」

「成る程、あー、まあそれは分かるのだが、うえー、でもなら、で
もなら、ウチの部より、まおんトコロの演劇部の方が良いと思う、
ウチはアレだ、全部員幽霊みたいな部活だから」

「そなん？」

「あはは、まあねえ、小梅ンところはワリとやる気無いのが集まっ
てるから」

「んー、できればもうちょい早く言ってほしかったな、私いる意味
無いやん」

「うはは……あー、ごめんな、別にそんなつもりじゃなかったンケ
ドね、んー、んじゃまあ演劇部見せてもらおうかな、いや悪いね、

ソレ言うためダケに残させちゃって」

「んー」

なんて言いつつも、どうにも私の肩すかし感は拭えない。

ハリキリ全部無駄になって、なんだかどうにも面白くない。

どうにも修まらない気もあるようで、私は引き下がるわけには行かなかった。

「んじゃー、私も演劇部見に行くぜ、良いよねまお？」

「別に、自由だと思うケド？」

「よしよしまあ、決まりだ、いざゆかん、いざゆかんー」

と、まあ、自棄とテンションに任せて教室を飛び出したのは良いけど。

「あ、あの、ソイエバ演劇部って何処にあるんスか？」

「おいおい」

まおは大げさなりアクションで肩を落とした。

そんなこんなで久々の部活動見学。

部室へ入った瞬間にソコにいた全ての人々から挨拶をされるまお。何だかいつもの彼女とは違う感じで、ソレだけこの部活に真面目に取り組んでいて、この部活が真面目に行われていることの証明のような気がした。

「部活動見学に来た和泉てんこです」

「その付き添いの春川小梅でーす……」

まあ、見学と言っても上演するような劇の練習は今の時期は無いらしく、主立った練習と言えばストレッチと発声練習程度。

こんな私にしてみればソレはあまり面白そうには見えないのだけど、てんこちゃんは先ほどから興味深そうにソレを見つめている。

言葉にして言うのなら興味津々ですと、示しているようなカンジ、ああ、なんかこうコイツなら真面目にやるんじゃないだろうか、ってそうカンジさせるオーラが出ているのが凄い。

コレができる女というやつかしら。

当の部員達と言えばこちらも流石現役部員と言うカンジ。

発声練習で出てくるのはいったい身体の何処からそんなモノが出るのかという広く厚い声。

ソレは部屋中をはね回るようにして、私の身体へもぶつかってきた。

人間本気になればどんなことだって出来そうだなと、なんか妙な可能性を感じてしまう。

「あ、どうかな、見学してみて……？」

と、てんこちゃんへと部員の一人が声をかける。

ちよつとばかり童顔で、ちよつとばかり慎重の低い男の子的な男。そのワリには口振りは対等で、って、コイツ一年生か？

「いや、もう、ホント凄いですわ。こーゆー真面目な演劇団体って近間にはなかったから、や、なーもう入部しちゃいたいぐらいっ」

「あ、なら、入部届け持ってく？ 入りなくなったら書いて持ってきてくれればそれで良いから」

そう言う彼の背中をつつき、ちよつと質問を投げかける。

「なあなあ、キミ一年？」

「二年だよ。クラス隣だろ」

「んえー、そだっけ？ ぜんぜん記憶にないんだけど」

「んー、噂通りとぼけてんのな」

「あ、ナニソレ噂って……？ ヤナ感じ」

「別に、そのまんまの意味だよ、はい、これ入部届けね」

「やー、どもですー」

「ナンだかな」

とは思いつつも、せつかくの機会。

普段は聞けない部活でのまおとかも、色々と見てみたいとも思っていた。

「ねえ、ちびっこいの」

「うえー、ソレ俺のこと？」

「ん」

「おまえと同じぐらいはあるだろ」

「いや、まあ、どっちでもイイや」

「よくねって、まあ……で、何、何さ？」

「あー、やあ、部活でのまおってどんな感じなのかナーと思って」

「俺にしてみれば、普段のまおを知らないんだけどな、部活での、まお、ね。んあー普段がわかんないからどう言ったらいいのかは解らないけど、まあ、部のエースだよってみれば、多分演技力も、発声も、動きだって部内で一番だと思う、賞だって結構もらってるしな、お前まおの出てる舞台とか見たこと無いの？」

「うん、無い」

「薄情な」

「いや、だってねえ、本人も興味が出たら見てくれればいいって言ったしね、タダちよつと興味出てきた。今度舞台って何時？」

「あー文化祭かな、多分、他にも学校行事以外でヤルかもだけど、そう言うのは流石に見ないだろ？」

「ご明察」

「だと思った」

「あー、ついでに言うつと君は？」

「俺が、何？」

「演技」

「あんー、俺は、あれだ、味噌っカスだ。そもそも俺の役って何時も」

「子役ばかり」

「そのとおり」

彼はその小さな身体で思いっきり肩を落とした。

ツれない態度だけど、何だかんだで話を合わせてくれているあたりワリとイイヤツなんだと思う。

てんこさんかというと、そこらの部員を捕まえて話し込んでいる。相変わらずに場慣れが早いというか、何処にでもとけ込める女だ。

何というか、少しばかりうらやましくなってくる。

何だろうか、ちよっとおもしろくない。

何でしょうか、今日の私はかつこ悪いな。

いつもかつこ悪いけど。

「んあー、かえろかなー」

「あれ、帰んの？」

「んー、見たいテレビあるし」

「ナンだそりゃ」

「まあと、てんこちゃんハー？」

「あたしはまだいるー、今日は練習日だしね、と言うかアンタも部活に顔出してやんなよ」

とのまあ。

「あー、じゃアタシもお暇しよかなー、お供しますぜ小梅さん」
とのてんこ。

「いーの、幽霊部員でも良いからって入ったんだし、んーじゃま、頑張ってるね」

「おー」

そして振り向いて。

「で、お供って何よ」

「一緒に帰りましょ、的な意味で」

「ハイハイ」

何だかんだで私もこの女の術中にハマっている様な気もしなくもない。

「マジか！ 絶対快晴だっていつてたのに！」

「天気予報は信じちゃ駄目！ とは言えアタシもハレだと思ってたケドーっ！」

突然の土砂降りで、辺りは視界すら遮るような集中豪雨。

私は近くにあるという彼女のアパートへ避難させてもらうことに

した。

とりあえず身体が濡れるより荷物が濡れる方がイヤなので、必死に身体で鞆をかくまいつつ、私たちは水しぶきを上げるアスファルトの道を全力疾走していた。

チャババババババ。

「うおー、靴がガポガポ言ってる、キモチワルイー、でもなんかオモシレー」

「あーあ、教科書置いてきて良かったー、全部買いなおしになるトコだったわー」

「ケータイはダイジヨブ？」

「んよよ、アタシの完全防水だシ、だいじょーぶ」

「ウメちゃんは？」

「アタシ持ってないからだいじょーぶ」

「あ、そなんだ」

彼女の部屋、薄暗く、彼女の性格、印象には似合わず荷物はあまり無い、がらんどろ。

アパート暮らしの友達っていなかったからあまり見たこと無かったのだけど、やはり一軒家と比べるととても狭く感じる。

1つ壁の向こうの雨音が、ちよつと古めかしいアパートを叩き続ける音が響いてくる。

バダダダダダダ。

「お風呂、入ってく？」

「うえ、いいの？」

「そんなビジョビジョで帰れなんていわへんよ、まあ、広くはないけどさ」

「んやや、全然構わないって、アリガト」

そんなわけでちゃっかりとお世話になっちゃう私。

今日初対面なのに随分なモンだと思うが、それとも彼女がそう感じないようにさせているのだろうか。

最初はタ立だと思っていた雨音も、いつまで立っても止む気配は

なく、これは本当に帰れるんだろうかと、ちょっとばかり不安がよぎってしまう。

「服、おいといたでー」

「あ、アリガト、って、その格好はナンでしょうか」

お風呂場に顔を覗かせる彼女は、なんかもうバスタオル一丁だったりで、何かバリバリに一緒に入る気マンマンなんです。

「狭いってこーゆー意味か……」

「うへへ、女同士ナンだから細かいこといわへん」

その距離、もはや密着状態。

一人でピツタリな湯船に無理矢理は入り込んでくる彼女は妙にテンションが高く、私はちょっと引きながらも、なんだかんだでもう慣れていたりもした。

そればかりかお風呂につられ、ちょっとばかり気を許している自分がいる。

いや、許しちゃいけないわけではないのだけど。

「あのさ……」

「なん？」

「んー、わたしさー、チョットてんこちゃんのコト悪く見てたかも」

「あはは？　どんな感じによ？」

「や、なんか空気読めないような、タダのハイテンション女みたいな」

「へえー」

「何？」

「いや、別にそのままだと思うよ、多分ソレで正しい」

「そう？」

「あははー、まあ……悪いのは考え方じゃない？　ハイテンションは格好悪い、突っ走るのダサイ、無駄に明るいのは馬鹿なんじゃないか、みたいに」

「そんな……、コトあるかもなー」

「アタシもそうだったからねー」

「そなの？」

「んふふ、引っ込み思案で、する前に失敗したらどうしようって、ヒキコモリ発想だった」

「信じられん」

「前に前に出ようとする連中とかアホらしいとか思ってたんだけど、気づいたときには私は何もして無くて、何処にも進んでいなくて」

そして彼女は一拍おいて、

「結局一番アホやった」

「あはは」

「まあ、コレは持論だけどこの時期の子供って、て言うかヒトって、斜に構えるのは格好悪イとか気づいても、どっか捨てられないトコロは有るんだよね。恥ずかしいとか、自分を押さえるような気持ちがあるままソレを出来ない自分を妬ンじやって、そんなヤツ馬鹿だよ、みたいな発想に行き着いちゃって、いや日本的な考え方なのかも知れないけど」

「そうかな」

「ソウだとアタシは思う」

「んー、まあ、考えてるとよう分からんくなってくるな」

「うへへ、まあ、それはそれで良いと思う」

そう言うとき彼女は私にピッタリと抱き付いてくる。

突然のことで声が裏返る。

「ひちよ、何やってんスカッ？」

「別に？ 折角だから」

「なーにが折角なのか良くワカランからーっ」

「え、や、なんじやろ、梅ちゃんとお風呂入った記念？」

「記念で抱きつくなくなっちゅうに！」

「や、もう好きになっちゃってまう」

「ぎゃはは」

「うひひひ」

「あはは」

「んふ」

「はー……」

「アタシ、難しいコトわからんもん、単純な方がええって」

「それは同意する、けど、スキンシップ過剰だぞ」

「えんよ、ヒトに好いてもらう自身があるから、好きだと思ったら躊躇わず！」

「うは、ちよっと、やふっ！」

「と、変な声出すなやあーっ」

「だって、だってやしーっ」

「ぶははっ」

「あははは……」

「あー」

「ん？」

「んー、何か知らないけど、てんこちゃん格好いいな」

「格好いいすか？」

「ん、男らしい」

「ダメやん」

「はは」

「なんか、でも良いね、てんこちゃん、凄くイイや、良く分かんないけど、好いてもらう自身があるとか、滅茶苦茶格好いい」

「アリガト」

なんて空気に乗せられつつ、私もちよっとハグし返しちゃったり。大胆ですな。

「ごちそさま、ゴメンね、ここまでお世話になるつもりじゃなかったんだけど」

既に7時を回っているのだけど、雨に止んでくれる気配はない。ちゃっかりついでに小さなちやぶ台で夕飯までごちそうになっしまい、なんだか申し訳なさまで感じてしまう。

とはいえ出てきたのは買い込んでいたコンビニ弁当なのだけど。

「やーやー、ぜせん気にせんとてーな、こっちも梅ちゃんいてくれておもしろいしね」

「うはは、そりやどうも」

そんな会話も降りしきる雨音に遮られ、とぎれとぎれになって相手の耳へと届く。

「あー、なんや本格的やね」

「ん、まいったね」

「あー、あれよ、ウチ泊まってく？」

「あれ、良いの？」

「まあ、良いよ、て言うか泊まってつてよ、何かアタシも凄く楽しい」

「えー、えへへー、あー、うんー、じゃあお言葉に甘えておせわになつちやおかなー……あー、電話良い？」

「あ、ゴメン、まだ引越したてで繋がらんのよ、アタシの携帯使つてな」

「あやや、すいやせん」

父はなんて言うか、あの小梅が初対面のこの家に泊まる！？なんてカンジで、ちよつとむすつとしたけど、相手が女子と確認したその後はサラッとOKしてくれたのでアリガトってあっさり話は終わった。

意外といえは意外。

「良いって」

「ヨカッター」

「あはは」

「どしたん、嬉しそうな顔して」

「いや、そう言えば友人の家にお泊まりなんて初めてだと思って」

「ん、まおちゃんとかは……？」

「遊びに行ったことは数え切れないけど、泊まったことはないなあ」「へえー」

他人の家というのは不思議なモノで、自分ではない誰かが一つ屋根の下で過ごしてきた、そう言った思い出が、軌跡が、全て染み付いたような、そうだったモノ。

自分のソレだけでも膨大な量なのに、全ての他人、全てのヒトに、家があつて、ソコにそれぞれの歴史が詰まつてる。

そう考えると凄いこと。

そう考えちゃうとキリがない。

人の家に泊まると、その一部を味わえるような気がして、いつもはみれない何かがみれる気がして、遊びに行くだけとは違う、何か別の物を味わえるような気がして、私はチョト嬉しかったりする。ワクワクする。ドキドキする。

まあ、今回は引越したばかりの家なんだけどね。

「あれ、そう言えば」

「なにー？」

「ご両親は、仕事？」

「あ、んー、いないよ」

「え、一人暮らし？ スゴ」

「違う、いない、もういなーい」

「えあ……」

「死んじゃったって言うか、殺されちゃった。まあ親戚のおばちゃんとか助けてくれてるから、何も困ってはいないしね、アタシ自身もうあんまり気にしてないから、別に良いよ」

「あ、ご……めん」

「だはあ、いいってー、普通気になるモン、当たり前だよ」

「んー……」

「制服干したら……もう寝よか」

「うん」

「ゴメンね、テンション落とす気じゃ無かったんだけど」

「なんで、てんこちゃんが謝るのさ」

「アタシだって、湿っぼいの嫌いやもーん」

「ふう、ふう」

笑い話だけど、布団は1つしかなかったので狭い布団に二人で潜り込むと言っさつきと同じような状態。

私は寝相が悪いので、多分てんこちゃんも夜間にのされると言うことをあらかじめ忠告しておいた。

「ホントはね、夜って苦手なんだ」

「ん、ナンでさ？」

「ヒミツ」

「なんだそりゃ」

雨音はますます激しさを増し、台風ナンじゃないかと思うほどの風は窓を大きくゆらしている。

しばらくの間続いた沈黙は、雨風が峠を越して、ようやく破れることとなる。

「あー、電気消すね」

「あ、ん」

天井の蛍光灯から伸びる紐をガツチョンと引っ張り、辺りは隣の彼女の顔すらも確認出来ないほど真っ暗になった。

「うひひ、なんかワクワクしてきた」

「あはは」

「実はアタシも初めてなんよ、友達と泊まるのって」

「そなんだ」

「うん、あー、真っ暗だと寝れないとか、ナイ？ ダイジョブ？」

「うん、大丈夫、真っ暗で良い」

「そう」

そう言つと彼女は再び布団をかぶり、何だかチョット笑って見せた。

「あのさ」

「なにさー？」

「私のパパとママを殺したのは、私の友達なんだ」

そう言つと彼女はもう一回、にへへツて笑つた。

「その友達、仲良かったの？」

「ん、毎日遊んでた」

「なんで？」

「解らない、二人を殺した後、すぐにその友達も自殺しちゃつたら、だから、何を考えてたのかは解らずじまい」

「後味悪いね」

ソコでもう一回、にへへ。

「でもね、少し、内心ね」

「何？」

「嬉しかったりもしたんだ」

「そうなの……？」

「私のパパは、旭インテリジェンスのお偉いさんでね、あー知ってる？ 旭インテリ、今のユビキタスの基礎を作つた会社」

「うん、知ってる」

「まあ、仕事のムシつて言うか、ソレしか興味がない人間でね、私も実の娘なのに数えるぐらいしか話したことがないんだ」

「……お母さんは？」

「ママは、あれは……豚だよ。好きなことはお金を使うこと、高い料理を食べること、ヒトに自慢をすること、パパの稼いだお金をまるで水みたいに垂れ流して、ブランドモノとか買つて、絵に描いたような典型的なブタ女」

「そっか……」

「私の友達は、ママだけを徹底的に殴り殺したんだ。バットで」

「お父さんは？」

「頭を一回殴られただけだった、見つかったときパパはまだ生きてたんだケド、結局病院で死んじゃつた」

「そう……」

そして彼女は一拍呼吸をおいて、そうして続ける。

「まるで、アタシがやったみたい」

「やはり、お母さん、嫌いだったんだ」

「うん、パパはソコまでじゃなかった、もちろん好きではなかったけど」

「そっか」

そして若干の沈黙、雨の音がバダバダと手当たり次第にたたき続ける。

「やっぱてんこちゃんてすげーな」

「んふ、なにが？」

本当に不思議そうにしながら、彼女は軽くほえんだ。

「だってさー、よくそんな切り替えられるっていうか、普通そんなに明るくなれないもん。私かもしてんこちゃんの立場だったら、下手したらその友達の後を追いかける羽目になってたかもしれない」

「別に持ち上げないでもいいよ、同情とか、そういうののために言っただんじやないし」

「じゃ何のため？」

「あー、はは、何だろね？」

「なんじゃそら」

「まあ……確かに、楽しじゃなかったよ、何度も死にたいと思う程に辛かった。だけど、アタシは生きることと意地汚いから、生きるためだったら何だってやるし、そのためにはならいくらでも自分を作り替えられると思う。タダ生きる事がどれだけ大変なのか、私はそれを知ってるから、だから私は生きることと妥協しないし、生きるための努力は欠かさないつもり」

「うへへ」

「なーにーい」

「タダ生きるだけがどれだけ大変か……かあ、なんか悲しくなってくる」

「んはは」

「私も、これから先、簡単には生きられないのかな？」

「たぶんね」

「あは、こえー、ずっと高校生でいてー」

「んふ、ふう……」

「でもさ、マジメに生きてるのって、生きることにも真面目なのって格好いいよ、やっぱり」

「アリガト……」

なんつーか、なんというか、私はある種このてんこという娘に惚れていたのかもしれない。

自分のできない生き方を先行するような、あこがれの先輩的なそういうったパワーを秘めているのかもしれない。

彼女はそう、まるで太陽のような人だから、そしてそれは自らを育て上げた結果なのだ。

自分を照らすための光が、そして今はその周囲にも光を振りまいている。

「あぎ……」

「どしたの？」

「て、テレビ、見忘れてた」

「あはは、ご愁傷様」

雲一つない空が広がる翌朝。

まるで台風一過みたい。

「んは、あ、あー……」

「おーおはよ、起きた？」

「お、おう」

「すごい寝癖」

「あ、あおー、一瞬どこだかわからなかった」

「うえへへ」

彼女がカーテンを開けると、青い日の光が差し込んで私はぐわーと身をそらす。

「灰になる」

「ならんて、はい、朝ご飯、コンビニ弁当は癖になるね」

「えー、へへへ」

「でもさ、あんまりのんびりしてられへんよ？ 今日だって学校あるンヤから」

「あれ、あ、あー！？」

「そーんなことだろうと思うたわー」

「てんこちゃんは、朝ご飯は！？」

「もー食べました」

「ひつどッ」

私は飛び起きて、急いで制服に着替える。

だいぶ乾いてはいるのだが、しっとりとした袖に不快な表情は隠せなかった。

「あー、がああ！ も嫌！」

突然雄叫びを上げる私に、彼女はおよと身をすくませる。

「な、どしたん？」

「もーいいや、遅刻してくべ」

「うえー、マジですか？」

「うん」

「せつかくのお泊まりなんだから、なんかもつたいない！」

「そーゆー問題ですか」

「わかったら、ほら、頭使って、良いんだから」

「なんよ？」

「だから、遅刻してもー、怒られない理由を考えなさい！ できれば出席点減らされないようなクールで、気の利いたやつがベスト！」

彼女は目を丸くして、しばらくキョトンとしていたが、ふっと人の悪い笑みを浮かべすくと立ち上がる。

「うはは、おーし、よっしゃッやつたるか」

「よっしゃよっしゃー」

ある意味では、それが私たちの日常の終わりだったのかもしれない

い。

そうして私たちは、この町は、日本は、世界は、簡単に生きられる世界から切り離されていったのかもしれない。

それは戦争とも、天災とも、テロとも、疫病とかその他諸々のカタストロフとも異なり、まるでゆっくりと壊死するように、私たちの日常は終わりを告げていく。

誰一人として気づくことはないのかもしれないが、ある意味ではそれが、大人になると言うことなのかもしれない。

あるいはそれが、生きると言うことなのかもしれない。

ハルカワコウメ

これは全てが始まる前の、私がまだ子供の頃のお話。

私の父は東北の地方出身で、家族皆で父のそのまた父の家へと年に数回遊びに行っている。

何も疑うこともなく、何も苦しむことのなかったそのときの私。今でもその時を思い出し、なんだか羨ましいようなそんな気持ちになることも少なくなかった。

さんさんさんと降り注ぐ日差しの下、父と母、そして私と桜姉さんは、父の借りてきた軽自動車に揺られその父の実家を目指していた。

山奥にあるそのくたびれ気味の小さな農村は、正直排他的な空気があつたりんだりして身内親戚でないと入り込みにくいところらしい。

父もまた、以前こそソコの住人ではあったモノの、都会へ出て、結婚して、子どもまでもうけた今にしてみれば村人にすれば他人も同然であり、つまりはまあ、そうほいほいと気軽に帰れるような場所でもなかったりする。

「ねえー、あーなたっ」

「んー？」

「やっぱり車はいつものところで借りた方がよかったんじゃないの、いくら軽だからってパワーなさ過ぎ」

「あはは、まあ、ねえ、安かったからさあ、ついね、安かったし、まあレンタカーショップで車の性能が決まるわけでもないし」

「まあ、つけばいいですケドね」

「はい、頑張ります」

そんなこんなで急勾配をへろへろになりながら車は進み、一つ坂

を登り切ったところでようやく木造建築の並ぶ小さな山村が視界に入ってきた。

「いよつし、小梅、桜！」

はいっ、と元気よく応答する私ら姉妹。

「二人はひとつ走りして爺ちゃんの家に行ってくるんだ」

「父さん達は？」

「父さん達はアレだ、村の人たちに挨拶しに行かないといけないんだ」

「わかったっ、ねーちゃん！ 勝負だ！」

「何を？」

「先に爺ちゃんのところにつく勝負！」

「んえー」

「じゃあスタート！」

そして私は車を飛び出し、あわてて姉も何事が叫びつつ私を追いかけてくる。

まだ初夏の日差しが清々しい頃、パタパタと地を蹴るサンダルの音と、協調性なく飛び交う蝉の声が耳に残っている。

「だあーっちょ、こら、待ちなさいてば！」

姉が追いかけながら叫ぶものの、圧倒的なスタートダッシュによって私の独走態勢は揺るがない。

そんな私たちを見てすれ違う村人達が首をかしげて振り返る。

「うあばば、よっさー！」

塀の角を曲がりお爺ちゃん家の敷地へと駆け込んだ私は「ゴール！」とひととき大きく叫び、両手を空に向かってつきたした。

「だあ、くそ、負けた」

「ふふん、勝った」

「まあ、どっちでも良いけど」

「いいのか……」

お爺ちゃんの言えには小さな庭が広がっていて、その隅に小さな

畑があつて、さらにその隅に小さな池がある。

「あー、お爺ちゃん、また隠れてる？」

「隠れてるかも、隠れてるかもしれん」

隠れている。というのは、まあ、我らがお爺ちゃんというのは変わった男であつて、私たちが来ることを知るやいなや、かくれんぼと称して家の何処かに隠れていたりする。

前回は事前に伝えて無かつたため隠れる前を発見できたものの、その前は完璧に姿をくらまし、父母一家総出で探し回り、夕飯どきになつてようやく屋根の上にいるお爺ちゃんを発見したのだった。

「今回はどうだろうね」

「やー、どだろう、かくれんぼスキルも上がつてるかも知れない」

「んー、夕飯までに見つかりますように」

「出てこなかつたら先食べちゃえば良いよ、ソウすればきつと出てくる」

「成る程」

そうして私たちは「こんにちはー！」「おじゃましーまーす」と叫びながら家の中に上がり込み、お爺ちゃん搜索を開始するのだった。

勿論分かり切ったことではあるのだが、チョットやそつとではお爺ちゃんは見つからない。

なんと言ふのだろうか、長年の知恵と経験と、それにちよつとの年金までも利用して完璧な偽装工作をするのだからソレも仕方ないことだと思ふ。

以前には二セモノの壁をこしらえたこともあつた。

「どう、いた？」

「いない、いるわけない」

「だいどこは？」

「イナイヨ」

「屋根とか」

「二回連続つてコトはないでしょ」

「うんむー」

とソコでガラガラつと扉が開き、庭に車を止めた父母も合流、結局一家そろつての搜索となりそう

「なちゃー、爺ちゃんいないか？」。

「いない、みつからない」

「父さんはアテない？ 昔は住んでたんでしょ？」

そう姉が問いかけるも父も両手を上げてまいったという感じ。

まあ父がアテになれば、コレまでも苦勞するはずは無かったのだから当然と言えば当然。

「まあ、手分けして探しましょうよ、アタシナニゲにコレ楽しみなのヨ」

「うーん、んー？ んー」

押し入れを開け、床下を覗き、屋根裏にもその捜査網は広がる、一階だけの平屋建ての建物ではあるけど、その面積は広くそしてまた隠れる場所には不自由しない。

お風呂場、台所、居間、廊下、寝室、玄関と、思い当たるところを片っ端から探してみるが、その姿は何処にも見つからない。

「あー、このかくれんぼつてさ、範囲つて決まってるの？」

「さあ、ルールが有るわけでもないしね」

姉は額に浮かび上がった汗を拭いながら、腰を伸ばす。

「あつづー、小梅ダイジョブ？ 休憩しよつか？」

「ん、んん、大丈夫」

「んー」

「んはは、頑張つて、頑張つて」

「ばれてるか、あー、でもさー、これって家の外に隠れたら完全に見つからないよね」

「んー……」

そして私は何気なくぼやく。

「なんだかさ、お爺ちゃんダイジョブかな、こんな熱い中ずっと隠れてちゃバテちゃうんじゃない？ 流石に、若くないんだし……」

「あはは、まあ、ねえ……ノびた状態で発見なんて勘弁だわさ」

「ん…………んお？」

「どうしたの？」

「わたし、閃いた」

「おお？」

「池じゃない、池？」

「池か！ そりゃ池涼しいね」

「池かも知れない」

「池、とりあえず言ってみよう池」

「うん」

私たちは庭へとかけだした。

「うごー、あれ、ソウじゃない…………？」

私たちがいってみると、小さな池の隅っこからぽこぽこ泡が上がつている。

ぽこぽこぽこ、明らかに魚や何かの呼吸ではない、その見えない薄汚れた池の奥底にもっと大きな何かが潜んでいる。

「あやしい、あやしい」

「ん」

そして姉はひよいと小石をつまみ上げ、ひよいとその泡の場所に投げ込む。

んぶん、と沈む石にあわせるように、ぽこふつ、と泡が大きく吹き出た。

「いるね…………」

「ん…………」

「第二射、いきまーす」

ソウ私が叫んだ瞬間に水面が大きく盛り上がり、そこからウェットスーツと酸素ボンベを携えた老人がのっこりと現れた。

「だあ、つつくしうめ、コンチクショウっ見つかったみたい」
「こんちはーおじいちゃん」

「おー、なんだ今年は随分呆気なくおわっちまったなア」

「うん、頑張りました」

「じょーできた、あー、あいつらもう来てンだろ？　だつたら飯にすんべ、飯に」

「まあ、その前にさ」

「あ、何？」

「お風呂は入りなよ、お爺ちゃん……」

「おお、まあ、そうか」

藻や浮き草にまみれ河童のようになっていたお爺ちゃんは、ドッコラセと池の縁からへばりつくようにはい上がるってくる。

濡れたウェットスーツが泥をこすり、その体はもはや汚れてるかそういうレベルではなく、私は思わず顔をしかめていた。

ソナな私を見て、お爺ちゃんはニヤリと笑っていた。

なんだかよく分からないけど、私はこの笑みが好きだった。

そしてもちろん、お爺ちゃんのこと好きだった。

「おおー、そんでよ、そっちの方はどうなんだ？」

決して大きいわけではないちゃぶ台を囲み、父とおじいちゃん、そして私と姉さんはちよつと遅い昼食を取る、母は台所でお茶を入れていた。

「やあ、まあぼちぼちだよ、会社も安定期に入っだし、これと言って事件もないし、平穩無事」

「おめえ、じゃねーよ、俺は小梅や桜に聞いてンだつて」

「ああ、はい、はい、そですか」

まあ、当然のことだが私たちにもそう大した事件があるわけではなかった。

小学生の夏休みなんてソナなモンで、何だかんだで後半になっては学校がうらやましくなっている頃。

「あはは、まあ、ソナな所」

「んだ、そうなんかよ」

「そんなんです。早く学校行きたくなって来ちゃった」

「やあ、まあ、なー」

「おじいちゃんは？」

「ん？」

「最近の生活はどうですか？」

なんて言われて何か答えにくそうなおじいちゃん。

ガジガジと箸をくわえてなんだかモガモガモガ。

「別に、どうともねえけどよ、毎日畑と、後はテレビだ。木曜のドラマが面白い」

「ドンなんだっけ」

「いや、まああんまり覚えてねーんだけどな」

「なんじゃそりゃ」

「ぎはは」

そういえば、と、前置きをおいて父が話に割り込んでくる。

おじいちゃんは一瞬顔を向けて、あとはそのままご飯を食べながら話を聞いていた。

「あ、いや、大したことでもないけど、この村も人が減ってきたねって」

「ああ、まあな」

「向かいの山田さん、亡くなってたんだ」

「んん、割とつい最近だけだな、最近急がしいつつうから特に連絡はしなかったけどよ」

「それはどうも」

「村長の所も奥さん逝っちまったしなあ、どうなんのかね」

「そうかあ……」

何ともいえない静寂が入り、そうして次第にその空気に耐えられなくなってきた私が口を開こうとした瞬間、もつと先に耐えられなくなった人がいた。

「んーっだよ、なんかあんと言えつての。さっきからグチグチグチグチ、グチグチグチグチ、グチグチグチ、かえって話しにくい

ムードにしてどーすんだよ？　なあ？」

「あー、いや、んー」

「だあ、からお前は何ツーか、何ツーか何だよなあ」

「解った、解ったよ言うつて、言うから、言います」

「おう言え、今言え」

そうして父は一呼吸間をおいて、話し出すのだが。

「前から言つてたことだけどさ……」

「やだね！」

「ちょ、まだ何も」

「やなモンはイヤなんだ。うし、まあ、どっか行くか、なあ、小梅たちもさ、何にもねーけどよ」

とかなんとか、ご飯も中途半端に私たちを家の外へと引っ張り出した。

何かちよつと、幼い私でもこれで良いのかなと、不安になるような父とおじいちゃん。

まあ実際の所、昔からおじいちゃんはこんなだったらしいし、昔から父は引っ張り回されていたらしい。

父べつたりな私の家族形態からは想像もつかない形だけど、なんというかどこことなく新鮮だったりした。

家族つてホント多種多様だ。

「おじいちゃん、アレでよかったの、ていうか何があつたの？」

こういうとき姉は食い付きが言い、まあこのときは心配して言うのが大きかったろうけど、新しい話につっこむのはどちらかという姉だった。

「別に、どうもこうもねえけどさ、前からなんだよ、一人暮らし大変だろっから、こっちに來ないかって」

「え、おじいちゃん引っ越してくるの！？」

「小梅っ」

「なに？」

「何じゃなくて、まあ、いや、まあいいか」

「ぎはは、まあ、なあ、俺アは行っても良いんだけどよ、俺だってもうこんないい年何だしなあ、どんな広い家でも使えないジジイが一人いたら居心地悪くなっちまう」

「そんなことは、ナイと思うけど……」

「まあ、良いんだよ、動いたら動いたで家も畑も捨てなきゃならぬいしな、売る相手もないから、あれだ、耕作放棄地ってヤツだ。

それじゃよくない。おまけに一説によると都会の空気は汚いらしい」
「うへへ」

「色とかついてるンかね」

「色はついてないと思うけど、川とかあんまりきれいじゃないね」

「そーか、じゃ俺は住めないな、俺はきれいな環境にしか生息しない」

なんてシヨンボリー、みたいなリアクションを取ってがっかりするおじいちゃん。

「で、どうするよ、何しますかい？」

「じゃあ畑行こう！」

「畑行つて何するんだよ？」

「収穫する！」

「何を？」

「何か！」

「解った、OK、よしきた、じいちゃんが何か適当にソレっぽいモノ収穫させてやる！」

「うっしやー」

私と姉は一度家へと駆け込み、父と母へ「収穫行ってくる！」とそれだけを告げておじいちゃんの軽トラへと乗り込んだ。

いつもは危ないからと乗せてもらえない荷台だったけど、今回は二人とも大きくなったし、と特別に乗せてもらうことができた。

たったそれだけのことなのに、その当時は押さえられないくらい

のワクワク感で胸がいっぱいになり、先ほどのちょっと心配や不安感などもどこ吹く風に清算している私がいる。

日常の少しの機微がこれほどまでに喜びとなっていた日々。

木漏れ日と日差しの繰り返す山道を真夏の風に吹かれながら、私は何ら意図を持つことなく笑うことが出来たのだった。

さしてくるまで行く必要のない距離を走り、村はずれにあるおじいちゃんの畑へと軽トラは向かっていった。

途中、どこかで見たことあるような村の人が、ある人は親しげに、ある人は避けるような視線で私たちを見ていた。

「おじいちゃん？」

「んだよー」

「何とるのー」

「とおいー、危ないから立つなよ、あー、あれだ、トマトだ。夏と言えばトマトだろ」

「うおお、赤い？」

「んー、赤い、赤い、時々青い」

「青いの？」

「青いつちゅうか緑だ」

「へえー」

ガゴガゴガゴ、砂利で覆われた道を軽トラがのろのろと走り、その荷台で私たちはガゴガゴと揺れていた。

「青いトマト見たことないんか？」

「うんー、あんまり記憶にはない」

「んー、そーゆーモンなんだなあ」

「みたいですねぇ」

「うおーし、ついたぞー、二人とも荷台のカゴ取ってくるんだ」

「あいさー」

「どのカゴー？」

「んあー、持てるヤツなら何でも良いさ、こつち来てみる」

ソコには都会では見なくなつて久しい畑が広がっていた。

茶色い地肌から伸びる青々とした野菜野菜野菜。

正直の所私にはどの葉がいつたいどの野菜なのか、その見当すらつかないのだが、それでも私の知つてゐる野菜のほとんどがソコに植わつてゐるような、ソンな大きな畑だった。

「おふあー！」

「広いね」

「ああ、俺の畑だ。当然広い」

「成る程納得」

「んじゃ、トマトはこつちだ。ほら、赤いヤツもうとつちまへ」

三畝ほどに並んでゐるトマト、赤いモノからまだ青いモノ、大きいモノから小さいモノ、全てが違ふ色形で、全てがどこか不格好。

お店に並ぶモノとはまた違ふ、くすんだ色で、でこぼこしてて、ただどこか愛嬌があつた。

「あつちは？」

「あつちはあれだー、あー、たぶんサツマイモ」

「へえ」

「サツマイモはなあー、まだとれねえんだよなあ、わりーけどよ、芋掘り面白いけどな」

「んー」

「あは、これ割れてるね、虫？」

「んにや、あーとな、水つ氣多いとそーなつちまうんだ。んじゃあ、ココはちよと頼むぞう、このハサミ使つて、まあ、取りすぎない程度に」

「了解じゃー、おじいちゃんは？」

「じいちゃんはアレだ、別のモノ取つてくる」

「ナニナニ？」

「秘密だ」

「けち」

「後で教えてやるよー」

「んー、うん、解った」

「うおーし、ではトマト収穫開始イ！」

「じゃー！」

私たちはトマトの森へとかけだした。

日がゆっくりと傾いて、周囲があかね色に輝いて、それに答えるように畑の草木もその色を変えていく。

なんだか自然と蝉の声も鳴き疲れたように感じられ、くたびれた山村全体にちよつとした哀愁を醸し出したりする。

「うおし、帰るかー」

「あれ、おじいちゃんいつからいたの」

「ぎはは、ちよつと前から、ちゃんと仕事してるか見ていたのだよ」
「のぞきー」

「うおう？ のぞき違う、違う」

「覗きー」

「ぎあはは」

カゴは私たちでは持ち上げられないぐらいのトマトでいっぱいになっていて。

おじいちゃんはソレを軽々と持ち上げ、車へと積み込むとエンジンをかけた。

「どだ、楽しかったか、収穫」

「うん、途中で飽きてきたけど！」

「だろうだろう、けどよく頑張ったなア」

「それはねえー」

「ん、頼まりましたからっ」

「おう、さすがだな」

そしておじいちゃんは私と姉さんの頭をぐりぐりと撫で、よいせと背筋を大きくのばした。

「ねえ、おじいちゃん？」

そこに服を引っ張りながら姉が訪ねる。

「んだう？」

「お爺ちゃんのトマトって何でみんな形が違うの？」

「んお、そうか、そうだな」

「スーパーのはみんな同じ形してる」

「まあ、じいちゃんのは売りモンじゃないからなあ、売るためにつくってんのは綺麗じゃないと買ってもらえないからよ、桜は綺麗なトマトの方がいいか？」

そう言われ、しばし黙り込む、というか考え込む姉。

「どうだろう？」

「どうかね」

「綺麗なのもいいけど、みんな違うのもいいかも」

「懐かしいな」

「何が？」

「みんなちがってみんないいって、そういうヤツだ。昔の詩か何かでな、じいちゃんが若い頃のだ」

「へえ……」

「まあなあー、俺もみんな違う方が好きかもなあ」

「何でー？」

「そっちの方が可愛いんじゃないかなあ、みんな同じじゃどこが良いかわからねーもんな」

「おお、成る程」

「でも、でもさっ」

お姉ちゃんが声を張った。

「何？」

「それじゃあさ……私トマト食べれないよ」

不思議そうな顔をするおじいちゃん。

「何だよ？」

「だって、さ、同じのがいるなら良いけどさ、同じのがないなら

食べちゃだめだよ」

「お姉ちゃん？」

「みんな良いなら、代わりなんてないもん、それじゃ可哀想だよ…」

…」

と、姉はか細く寂しげに、はき出すようにして告げた。

私はそのときのおじいちゃんの顔を今でも忘れることはできない。ひどく困惑したようでもあり、そしてそれ以上に、この上なく悲しい顔をしていた。

ただでさえ皺だらけのその顔に、さらに深い皺をぎゅっと刻み込み。

小さくムセ込み、そうして言葉を選ぶように話を続けた。

「ああ、まあ、そうかもなア……」

「そうだよね？」

「んー」

今の私は、トマトが可哀想などと言うのはおかしいと、そう考える多くの人を知っている。

当時の私は、あまり深く考えることはなく、可哀想なら可哀想なのだろうと、直接的に受け止めていた。

そしてたぶん、今の私もまた、トマトが可哀想などと言うのはおかしいと、そう考えるうちの一人だろう。

たぶん姉だって、そうだ。

「まあ、でも食べてもらうのもトマトの仕事だろうよ、少なくとも人間はそのためにトマト育ててんだ、もちろん、それが人間勝手な考えだってことはわかってるけどよ」

おじいちゃんは、どう思っていたのかな。

今となってはわからないけど、それでもおじいちゃんは、そんなおかしいことを言うな、と姉をとがめるようなことは決してなかった。

「じゃあ、私は綺麗なトマトが良い」

姉は。

「みんな同じで、みんな綺麗なトマトなら、いくらいなくなっても
変わらないもん、だからそっちが良い、そっちが良いよ」

優しい人なんだろうか。

「そうだなあ、じいちゃんのトマトは可哀想なトマトになっちまう
なあ」

「違うよ」

「んう？」

「お爺ちゃんのは可愛いトマトだよ」

「おお、そうか……」

「そうだよ」

「なんだかウレシイよなあ」

「どういたしまして」

そうしておじちゃんはもう一回、あの私が好きな笑顔で笑ってく
れていた。

「そういえば、おじいちゃん」

「なんだよ？」

家の中へとトマトを運び込みながら、私はおじいちゃんに尋ねた。

「おじいちゃんは何をとってきたの？」

「ああ、そうか、そうだよなあ」

「なにー」

「ほらあ、これ」

そういうとおじいちゃんは、荷台に載せられた小さなカゴを指さ
した。

「わあ、虫！」

「ええ、ちよつとー！？」

「まあまあ、跳んだりねたりはしねえからよ」

と言っておじいちゃんを取り出したのは蟬の幼虫。

茶色いそいつらはキコキコとした動きで虫籠の中を歩いていた。

「ほら、触れるか？」

「あたしは大じょぶ！ 姉ちゃんはダメ！」

「わ、私だって大丈夫だって！ ほら！ ほら！」

「わ、わ、わ」

「じゃあソレを、そこだ、網戸につけるんだ。ほれ、下の方に」

「あ、上ってる」

「うん」

「上まで上ってくるのを待つんだ」

「待ったら？」

「下まで戻す」

「ヒドっ」

「ひどくなんかねえよ、こうやってセミになる場所を決めてんだよ、ちょうど良い場所を見つけたら落ち着くんのだ」

「ふえあ、見れるの！？ セミになるとこ！」

「ああ、早起きすればな」

「わたしする！」

「え、あ、じゃ私も！」

そうして私たちが話している間も3匹のセミの幼虫たちは、ゆっくりとゆっくりと網戸を上っていく。

透き通る羽を広げるために、そうして空へと飛び立つために。ほんのわずかな命を謳歌するために。

セミたちにとってはソレが唯一の生きる手段なのだろう。

「ねえちゃん、起きて！ 朝だよ！」

「朝じゃない……まだ真っ暗」

「朝だよ！ セミ見れないよ！？」

「んー……」

「があ、だつ、もつ！ しらん！」
「うえー」

ようやく姉を引きずり出し、表へと出て行くと、そこにはすでにおじいちゃんが待っていた。

「セミ！ どう？」

「おお、これこれ」

そこには、白いセミがいた。

茶色い背中にできた亀裂から、ソレは垂れ下がるように地面を向いていて。

ただの白ではない、透き通るような輝きに、青、緑、赤、うつすらとした色合いが、まるで陶器の模様のように浮き上がって見えた。
「なは！ 見てよ！ これ、見てよ！」

「おう、見るよ、見るって」

「ほら、お姉ちゃんも！」

「うん、見るよ」

そうしてゆつくりと、彼らは羽を広げていく。

皺だらけだったソレは、次第に光を帯びて、色を帯びていく。

「あれ、こいつ……」

「羽……シワシワなままだね……」

一匹、羽が伸びない。

「おじいちゃん、こいつ……」

「ああ、そうか……」

それ以上おじいちゃんは何も言わなくて、私たちも何も言うことができなかった。

「ダメ？」

「ダメかもなあ……」

「そっか」

「生き物だからな、こついうこともある」

「生き物だから？」

「生きてるんだからな、人間ぐらいだよ、例外は」

「そうなんだ」

「ああ」

「人間ってすごい？」

「俺にゃーわからん」

「そうか……」

「へへ、どしたよ？」

「別にどうも、生きるのって大変だなあって」

「おいおい、若者が何いつちよるんだイ、おめーらはコレからだろ、コレからだ」

彼らの羽はゆつくりと、透き通る純白から見慣れた茶色へと変わっていく。

無垢な色を捨てて、真夏の空でも羽ばたけるように、強く堅い羽を手に入れる。

「俺はもう、そう長くないからな、後はもう、おまえたちの番だろ
うよ」

ゆつくりと空が白んでくる。

そうしてそのうち一匹が大空に向かい羽を羽ばたかせた。

「とんだ……」

「だなあー」

「ダイジョブかな……」

「なあに、大丈夫だろうよ、それなりにやってりゃ死にゃせん」

「セミが？」

「別に、セミだけじゃないがなあ」

「そっか」

「そーだよっ、飛べ、ほら、飛ぶんだ！」

「おう、飛べ！」

「お前もだよ！」

「あたしもか！」

「おう」

「うああー！ 何だろう、すごく悲しい」

「うぎはは、小梅は大変だな、笑ったり悲しんだりよオ！」

「子どもだつて大変なんです」

「だな！ まあ、あれだ、綺麗なところはもうおしまいだ。桜も、あんまり寝てねえだろうに、昼間起きてらんなくなんぞ」

「うん、だけど私はもう少し見てたいな」

「んおーう、小梅は？」

「あつしも！」

「そうか、おう、そうか」

「うんー」

それから数年後の夏。

私のおじいちゃん、春川善治郎は呆気なく亡くなってしまった。あの日のような真夏の日差し、あの日のような赤く熟れたトマトの中で、私のたった一人のおじいちゃんは帰らぬ人となった。

結局あの後も、おじいちゃんは私たちの所に来るようなこともなく、あの村に残り続けた。

だからではないけど、誰かが一緒におじいちゃんの所にいれば、おじいちゃんはもう少し長生きできたのかもしれないと、心の中で思う日々が続いていた。

もつとも、そんなことをおじいちゃんが認めるとは思えないけど、私にとってのおじいちゃんとは、おそらくその人生の間で出会ったもつともカッコイイ人間であろう。

それほどまでにルールを持たない、自分のルールを曲げない人間を私は今後の人生で目の当たりにすることは無かった。

正直私には、あこがれるような人物が多すぎるような気がする。だけど私はそのダレにも似ていない。

だから私は、私が好きなかもしれないけど。

それは全てが始まる前の、私がまだ子供の頃のお話。まだ大人になる前の夏。

まだ子供でいられた頃の夏。

今はただ、キラキラと輝いて、笑い疲れ、ゆっくりと眠ろう。
この先に待つ、日々のために。

ハルカワコウメ f

たくさんの季節が過ぎて、そしてまた夏が来た。

そしてその夏もおしまい、今はただ熱気だけがあつい、あつい。

私もまた季節と共にたくさんの年月を過ごし、そうしてゆつくりと大人になっていき、そしてあつという間に多くを失った。

今、私の目の前で、あの自殺アパートが取り壊されようとしている。

楽しい思い出、つらい思い出、忘れることの出来ない私の人生最大のモメントが、数日前よりゆつくりと取り壊されて行っている。

それはそう、ゆつくりと死んでいく私のようにみえる。

鉄骨を切り取られ、崩れ落ちていく私のように。

今はもう、涙も出ない。

泣く必要も、無いのかもしれない。

だから私は仕方なく笑っているしかないのだ。

季節の終わり、夏の終わり、死んでしまった世界の中で、私はただ笑っているしかないのだ。

「なんだかなーって思うよ」

「何が？」

「やあ、なんだかね、なんだか解らないんだけど、ちょうどなんだかなって感じ」

「やりきれない？」

「何が？」

「何がでもないだろう」

「まあ、そうかもしれんけど」

「……大丈夫か？」

「何がさ」

「何もかもだよ、次やったら今度は俺が殺すぞ？」

「やあ、物騒ね」

「勘弁してくれよ、本当に」

「先生がいるなら、大丈夫なんですよ？」

「まあな」

そういつて彼は足を組み直し、ふうと、ため息を漏らす。

「疲れてる？」

「まあね、最近は誰も彼も病んじまって、おかげで俺は大もつけさ」

「せんせー、あんまし嬉そーじゃないね」

「まあー……なあー」

「うはは」

「あー、あれだ、お茶、おかわりいる？」

そういつて先生は立ち上がりポットに手をかけるが、私はそれをピシャと止めた。

「やあ、いいです、もう今日は、早めに帰りますんで、お姉ちゃんもそのまんまやし」

「あれ、そう？」

「はい」

そして先生は自分のカップにだけ紅茶を入れ、すうと喉に通し、しかめた顔をする。

「ちよいと苦かった」

「あはは」

「あー、あれだ」

「ねえ、先生？」

「あー、まあいいか、ハイ……なんでしょう？」

「私たちの部屋も、そろそろ潰されちゃうんです」

「ん、そうか……あー、もう、そうか、半年になるか」

「ですね、6ヶ月と、20です」

「ああん、そうか、ん……」

「ああ、やあ、ソンな顔しないでくださいよ、良いんですよ、あのあと遺書も見つけましたし、流石にまだ生きてると思ってるから、だから、もう良いんです。ただ……」

「ただ？」

「いえ、タダ、思い出そうとすることだけはやめられなくて、つらいし、たぶん思い出さない方が良いとは思ってますけど、それでも自分の中でナニかが自然と整理しようと思いついて出ちゃうんです」

「そうか、まあ、そうだよなあ」

先生は少しいなるように顔を伏せ、やがてつぶやいた。

「まあ、コレは、あまり聞かなかったことにしてもいい」

「んえ？」

「俺はまあ、気にしないようにとも言ったことも出来ないわけで、キミの場合は、俺はそれでも良いと思う」

「……？」

「キミの場合はナットクするまで、気にした方が良いのかも知れないって思う、コレは先生として言うか、どっちかというと個人的な考えだけど、その方がキミは前に進めるし、タブン今までもそうやって生きてきたんじゃないかってー、あー、そう思う」

「んふふ」

「おかしいっすか」

私は口元を押さえ、ちよつと手を振って見せた。

「いえー、別に、何でもないです」

と、それだけを返す。

なら笑うなよ、と、先生は大げさに肩をすくめた先生は。

「焦るなよ」

と、ただ一言だけ私に告げた。

「ただいまあー」

新しく借りたアパートの一室、かつての家は既にもうない。

「んー」

「お姉ちゃん、帰ったよ？」

「うん……」

廊下にカラダを放り出した姉は、タダ一言そうつぶやいて顔を伏せた。

「おねえーちゃん」

「んー」

「寝るなら、フトンでって、ねえ」

「ん」

「ほら、立って。お布団までいこ？」

「……」

「あー……ちくしょう」

私は押し入れから掛け布団を引き出し、姉のカラダにかけた。

姉はカラダをよじり、ソレをよそへとやった。

部屋の照明は消され、テーブルの上には用意しておいた夕飯が手つかずのまま残っている。

私は余り物に少しでも口をつけ、胃の痛みに耐えきれずに箸を置いた。

「だふう」

部屋は、汚れていた。

片付ける時間もあまりなく、片付けても姉が散らかしてしまふ。

いつの間にかソレになれていて、片付けようと思うことも減っていた。

それじゃ駄目だとは思っただけど、そう思うことにもなにやら疲れようになっってきている。

仕事場は後がなく、サービス残業は連日続く。

社長の人柄に助けられているようなモノで、私のようなお荷物相手に安月給を払うにも気が引けるだろう。

誰だってソレは知っている。

ああ、私だって、知っている。

なんだか、カラダが重い。

お風呂に入る気もわかない。

おかしいなあ、と思うのだけど、何がおかしいのかは私には理解できない。

私は何をするでもなく、少しか部屋の中をうろついて、そうして何もすることが出来ずうずくまった。

「お姉ちゃん？」

「ん」

「……………私、明日も早いから寝るね？」

「ん」

「もう寒くなってきたし、風邪引くよ？」

「……………ん」

「かーぜっ、ひくよ？」

「……………」

私は廊下にフトンを引き。

そして姉を引きずりそこに横たえた。

姉は、いやがった。

「ほら、寒いとダメだよ？　ね、お休み、ね？」

「……………」

「ね？」

「こつめ」

「……………なあに？」

「ごめん」

「うん……………ん」

電気を消してフトンに入る。

どうしてか、体は少しも温かくない。

真夜中に物音がした。

部屋の明かりはついていて、姉が台所に立っていた。

「小梅、おはよう?。」

「あ、うん? おはよう」

「うん」

「何やってるの」

「……お料理?」

「朝ご飯?」

「うん」

「手伝おっか」

「いい」

「……そう?」

「小梅は、学校早いからね、遅刻しないように」

「……ありがとね」

「お父さんも、会社大変だよ」

「うん」

「お母さんも……」

そこまで言って姉は手を止めた。

その先に続く言葉が、解らないのかそれとも言えないのか。

突っ立ったままの姉を見て、私は我慢することができなかった。

「お、姉ちゃん……」

「小梅、なに?」

「もう……みんな、いないから」

「あれ?」

「いないんだって」

「お父さん達の分つくらないと……」

「だ、からッ!」

私はそこまで言って、それ以上言うのをやめた。

続けることが出来なかった。

「私は、私はもう……学校は行ってないから、大丈夫だよ?」

「……」

「だから、手伝うから、一緒につくろ? ……お父さん達、大変だ

もんね」

「ん」

そして包丁を握る。

お母さんも、お父さんも、みんなって。

口に出すのが怖かったのか、確認するのが嫌だったのか。

私は黙って、包丁を握っていた。

「小梅？」

「あ、うん」

「大丈夫？ 疲れてない？」

「ダイジョブ、向こうでやってるね、台どこ狭いし」

「うん」

どうしてこんなコトになってしまったのだろう。

途中まではうまくいっていたよね。

誰に確認するでもなく、私はそうつぶやいて、そして自問した。

答えは出ない、ソコにあるのはいつもの何だかなあ、と言う感覚だけ。

おかしいなあという思いだけ。

つまりは何もないようなモノ。

「お姉ちゃん」

「何？」

「……あー、ごめん、何でもない」

私の中にふと浮かんでいた考えは、自分でも繰り返すコトが出来ないほど恐ろしいことだった。

そしてそれは、自分でも、それが本当に自分だったのかも解らない。

トツ、トツ、トツと包丁がまな板をたたく音だけが私の耳に届いて、なんだか次第に意識が薄れていくようで、自分が自分を保てないようで怖い。

少しの間ぼっとしていた私は、繰り返される包丁の音を頭の中で反復し、なんだか私の心や精神とかそんな物みんが。

細切れにされてグチャグチャに混ぜられていくような、そんな感じがした。

「小梅……？」

突っ立ったままの私を不思議に思ったのか、姉は私にそつと問いかけ私を椅子に座らせた。

「あ、大丈夫？」

「うん……ん」

「やっぱり、休んでてよ、ね？」

「そう、そうだね」

「無茶しちゃダメだよ」

「うん」

私は包丁を握ったままだった。

きつく握りしめて、指が痛くなりそうな程に握りしめて、私は何かが流れ出そうとするのを押さえていた。

逃げ出したくて、逃げ出したくて。

そんなことを考えても何も解決しないのだけど。

私は終わりを作りたいかった。

「ねえ」

「何？」

「お姉ちゃん」

「……ん？」

「……ゴメン」

私は腕を振り上げた。

高く、高く。

刃は蛍光灯の光を反射して、とても控えめにその光を送り返してくる。

ためらう前に、苦しむ前に、ひと思いに。

悲しみの前に、全てに終わりを。

振り下ろした手には重い感覚が。

目の前には赤い風景が。

そしてわずかながらの開放感が私の全てを支配した。
「お姉ちゃん……」

ゴトリと重い音をたて、私のカラダは力を失ったまま床へと倒れ込んだ。

強く打った体も、頭も、もはや何かを感じる余裕はどこにもなかった。

「あえ、こ、うめ？」

「あ、ぎ、うへ……」

なんだか疲れてしまった。

「あれ、なんで、よ」

「うん……へへ、あ、ぶ」

視界がぼやけてきた。

カラダが自分のモノじゃないみたいな感覚。

なんか、少し面白かった。

「ひっ、ぎっ」

血が、出た。

「お姉ちゃんっ」

「な、に」

「お。ねえちゃんっ！」

もう、それっきり何も見えなかった。

今はゆっくりと眠ろう。

次の日々は、もうないのかも知れないけど。

私はその屋上で私がかつて過ごしていた町並みを眺めていた。
迷いはなく、後戻りする気もない。

いつだって一人の私には今も昔もここから見えるモノだけが全て

だった。

だから、人生の最後はその全てが見えるココで迎えたいと思っていた。

「なんもなかったなあ」

自然と自嘲的な笑いだけがこぼれ、それっきり私は何も出来ずにいる。

踏み出しては踏みとどまってを繰り返し、余計な考えを振りほどこうとするほどにその考えに絡め取られていくような気がした。

それなりの決心はしてきたつもりだったがいざその段階になってみればわき上がったくるのは恐怖心ばかり。

そんな自分にじれたさと、ほんの少しの愛着のようなモノを感じ余計にそれを捨てることをとどまってしまう。

子供の頃から、変わらない私。

「ばかじゃんねえ」

誰にとでもなく話しかける私。

当然返事など帰ってこない。

それとも私は、まだ誰かに助けてほしいのか。

いつまでも悲劇のヒロイン小梅ちゃんを演じているつもりなのか……。

私は、ヒロインでも何でも無い。

世界の片隅でこっそりと消えていくだけの存在だと言うことに気づくまでどれだけの時間と犠牲を払ったか。

何を失ってまで手に入れた現実がコレなのか。

私はそのことを思い出し。

そして、この世から消えるための決心をつけた。

「よし、行ける」

風の音がする。

手すりを乗り越えた私に、共に消えんとする夏の名残がそっとほほを撫でた。

それはまるで、一緒に死んでくれるの？ と問いかけてくるよう

に。

後は手を離せば私のカラダはそのまま地面へと落ちていく。

「おあ、死ぬのか」

あいつの顔が見えた気がした。

「ふあ……」

なんだか自然と涙がこぼれてきて、なんだか自然と誰にでもなく謝っていた。

「ごめん、やっぱりダメだったよ私」

なんだそりゃって。

「ホントに、ごめん」

あの女は私のことを馬鹿にするだろうか。

「でももういーんだ。コレで全部終わりだもん、みんなのトコロ、行けるのかな？」

そういつて私は瞳を閉じて、深呼吸をした。

やはり風は気持ちいい。

どんなときであっても、ココだけは私に優しくしてくれた気がする。

「だあ、ちくしょ、待てやオイ！」

がんがんと、階段を駆け上る音がする。

誰かと思って振り向くと、そこには見慣れた男がいた。

「牛久せんせ……でも、なんで？」

「だあ、も、しるか、なんでもなんもあるかよっ」

「だって」

「良いからっ、こっち来い、落ちんなよ」

「無理だっ」

「なんで」

「無理だから、ココにいるんだから」

「だからっ」

「来ないで、来たら、落ちるから」

「あー」

「来ないでエ！」

私は声を荒げて先生を追い払うのだけど、それでも先生は近づいてくる。

そして何故か私は飛び降りることが出来ずにいた。

「なんでよお、なんでそうやって私をバカにするの？ 助けになんて来られたら、私は飛べないって解ってるのに、何でそういうコトするの？」

「バカ、解ってンからするんだろくに」

「何で！ 助けてほしい時には誰も助けてくれないんだよ！ 何で死のうとするときになって助けに来るの！」

先生は私を抱き寄せるようにして押さえつける。

なんだか懐かしさすら感じるこの姿。

いつかの私たちを思いだすようなその姿。

反射的にぼろぼろとこぼれ落ちた涙は、遙か下へと落ちて見えなくなつた。

「なら死ねよ」

「え？」

「助けてほしくて死のうとするヤツなんて、さっさと死んでしまえ」
そういつて私を力強く抑えつける先生。

ソレは心地よく暖かい。

情けなくなるほどに、生きてる喜びを感じさせた。

「ホントに死にそんなヤツを助けないで、他に誰を助ければ良いんだよ俺は……小梅、もうやめてくれよ」

「あ……ごめん……」

「戻ろうな」

「ん……」

先ほどまでの感覚が嘘のように、頬をなでる風がイヤに冷たく感じる。

まるでこの風景が、初めて私を敵と見なしたように。

早く死ねよ、早く死ねよとはやし立て、私に冷たく当たってくる。実際には、私を取り巻く世界の多くなんてなんら変わっていないハズなのに。

ほんのちよつとした感情の機微や、そのときの気分なんかで世界なんて全く変わってしまうのだから。

ソンな世界の中で、私は辛く苦しんでいる。

いつまでも弱い自分を崇めるだけの悲劇のヒロインを演じている。敵がいないと不安になつて。

いじめられているんだから助けてもらえと思って。

私は生きている限りかわいそうな小梅ちゃんのまま一生を過ごす。そしてソレを、どこかの底で望んでいる。

いくら死のうとしている人を助けても、助けられた時点でそのイミは変わってしまうから。

私は抜け出せなかった。

いくら先生が暖かくとも。

いくら世界が優しくとも。

夏の終わり、私の終幕もいずれやってくる。

「また、飛べなかったなあ」

私はつぶやきながらアパートを後にする。

いつかと同じつぶやきを残し。

「悔しいなあ」

いつもとは違うつぶやきも残して。

世界は何事もなくいつも通りだが、私はこの夏に蝉の声を一度も聞いていない。

もしかしたら、この世界は私たちのような生命が生きるには、厳しすぎるのかもしれない。

その思いがまた、弱すぎる自分をいつそう嫌いにさせた。

ハルカワコウメ

季節は変わり秋になる。

残暑も息を潜め、木々も少しずつ秋色に染まっていく。

夏休みは終わり、また鬱々とした学校生活が始まるのだけど。

秋はいろいろと行事も多く、勉強はないけどみんなで学校、みたいなそんな空気は嫌いではない。

文化祭が近づき、いつもとは違う学校の活気。

なんだかワクワクしてくるのだけど、そのワクワクをフルに活用できないのも私だった。

「でよー、ほんじょさーん」

「ういいうい？」

「なんつか、秋ですね」

「まあー、なあ、秋だなあ」

「なんかいつの間にか寒くなってきたて」

「だなあ」

「この前なんか風呂上がりパンイチでいたら風邪引きそうになって」

「それはさあ、俺に言っなよ」

「まあ、ですかね」

美術部の部室で本城氏と二人。

特にやることもなく、特に目的もなく、のんびんだらりと過ごす放課後の部活動時間帯。

活動時間なのに、部室にいるのは私たちだけで、つまりは今暇なのは私たちだけと言うコトなのかもしれない。

手持ちぶさにペンを回しながら、私はここ数日もややと抱えていたコトを提出してみる。

「なんでしょうかー、あれですよ」

「どれですか」

「だからあ、あたしらもなんかやらないんですかねー、文化祭」

「あたしらって、美術部でか？」

「んーんー」

「でもさー何かとか言われてもなあ、お前だってクラスの出し物だつてあるだろ？」

「まあ、そうだけどー」

「そもそも、部活の出し物申し込み期限過ぎちゃってるし」

「あー、マジなのか？」

「まじまじ」

「なんでい、つまらん」

私はだらだらとテーブルに突っ伏しておんぼろなそいつの脚をガツガツと蹴る。

まあ、たとえ申請が通つてもなんだかんだで途中で投げ出しそうな気がしないでもないが。

多少は意を決して言ったことなので面白くない。

「そもそもさあ、出し物するって何をするワケよ？」

「えー、何だろね？」

「展示とか？ 美術部だし」

「あたし今年入ってから一枚も描いてないよ」

「マジか」

「あんたは？」

「ゼロつす」

「ですよね……」

「まあ、そんなモンだよ」

「なんつか、私らって何もしてないんだなあー」

大きく開けられた窓から秋の風が入り込んでくる。

おお、コレってもつと頑張らなきゃ行けないんじゃないかなろうか。

校門に備え付けられた巨大な看板が、なんだかちよつと私を焦らせていた。

「ほんじょー」

「何？」

「この後あんた予定ある？」

「ないな、珍しく」

「はいはい」

「で、なにさ」

「あれだ、作戦会議」

「なんのよ」

「わかんない、ケド、とりあえず作戦立てておく」

「はあ、作戦すか、場所は」

「アタシン家で」

文化祭まであと二日、ぶっちゃけ私は暇な自分が嫌だった。

ひとたび忙しくなれば愚痴ばかりだが、それでも何か、頑張ってる奴らを直視できるぐらいの何かしている感が欲しかった。

引け目かも知れない、ただ、この劣等感すらも感じなくなれば私は本格的にダメになる。

それだけは妙に確信があった。

「あれだ、青春会議にする」

「青春会議？」

「そう、熱き魂と、やる気と、ガンバリズムとか総動員して、なんかさ、そんなの」

「んー、見えてこんな」

「そう、なんかそうだよ、見えないの、大切なことは」

「そうなのか」

部員はたくさんいるハズのこの部だけど。

知ってる人などその半分いるかいなかったりで。

そんなのってアレじゃん、青春してないというか、やっぱりアレだから。

何でも良いのでガムシヤラに、何も見えなくても良いから、何の成果もなくて良いから、そんな感じです。

「ただいまあ」

「おじゃまーす」

「おほおー、いらっしやーいーっ」

帰宅と同時になんかハイテンションな姉がいた。

「あれ、何かいる、どしたの」

「誰？」

「あーいや、姉」

「へえ」

「なぜアタシを見る」

「別に」

「でえ、大学は？」

「あー、んー、まあね！ サボってきたヨ！」

「良いのか」

「大学ってそんなモンよ」

「へえ」

「で、サボって何してんの？」

「あー、いやあ、ねえ？」

なんて急に元気がなくなってくる。

「おーい、ダイジョブかー？」

「あーんー」

私の姉というのは妙にわかりやすい生き物であって、何かひどく落ち込んでいる時ほど無理矢理テンションをあげる傾向にある。

帰ってきたときから妙にそんな予感はしていたのだけど、たぶんきつと、そうなんだと思う。

「どうどうどう」

「だいじょぶスカ」

「あー、ちょー、もう、あんまり私を哀れむなよっ！」

「えー、そりゃないよ」

「あーもー、だっあもった！　ちよう、少年少女達、暇か！？」

「これから青春会議が」

「何だよソレ！」

「なんだっけ？」

「や、だから熱と汗と、あー、やる気とかの会議、アタシ議長」

「じゃあそれ中止」

「え、勝手に！？」

「おう！」

「まあいいけど、どうすんの？」

「いや、良いのかよ、お前言い出したのに」

「酒を持て！」

「はあ？」

「飲み行くぞ！　アタシ持ちだから！」

「えー、んー」

なんかそれで良いのかと思わなくもないけど、それで良いような気もした。

元々目的何て無いのだから、何かやる事が出来ただけでも良いのかもしれない。

それにちよつと、憧れでもないけど、酒を飲んでワイワイする未成年つてのも、なにやらちよつと青春チック。

私のような引ッ込み思案にはまたとないチャンスのようにも見えて、なんだかそれは少し魅力的。

さあ酒だ、なんて姉も本格的な大学生だな、とか、ちよつとそんな気がした。

「俺たち、まだ未成年なんですけど」

「ンなコト知ってるよ、大学は入りゃ未成年でも飲むんだよ」

「んー、まあ、良いんでねえ」

「うえ、議長、それでいいんすか？」

「うん、議長の名において命ずる」

「マジですか」

「うん、酒飲みながら会議すればいいじゃん」

「議長、それ社会出てから言っちゃダメだよ」

「うん、言ってからそう思った」

結局の所、外の飲み屋とかはさすがにマズいと言うことになり、姉の持ち込みによる桜ちゃんを慰める会が開かれることになった。

「あー、まお？」

「うん、携帯にそれ以外出たら怖いだろ」

「だな。まあ、ンなことどうでもいい、なあうちに飲みこねえ？」

「おう、いくいくー」

「なんか軽いなあー」

「誰か他にも連れてく？ 今てちゃんと明智君いるけど」

「明智？」

「えーと、あれだ、あの、あー、ちっちゃいの！」

「ああ、解った、まあどっちでもいいや姉持ちだから」

「へえ、ご馳走様です。まあ、いいや、適当に見繕ってくよ」

「おう、待ってるから」

ぷつん。

折角なので友達とか集めてみようという展開で、まおからはあつさりと参加の意思表示が帰ってきた。

「どだって？」

「ん、今から来るってさー」

「そうかそうか、あいつ結構飲むぞ」

「そなの？」

「んー、演劇部って結構アレな所もあつからなあ」

「へえー、意外」

「俺も意外だった」

なんだか人それぞれ、私の知らない部分も結構あるモノだと今更になって思う。

知った気になっているとそれは余計に大きい。

解った気しているとショックも多少アル。

「あんたは？」

「俺？」

「んー」

「おりゃー、そりゃ、飲めねーよ」

「お、そりゃまた意外だな」

「まあ、そんなモンだろ」

「とー、ゆーかみんな結構飲んでるんだね」

「小梅は飲んだことないん？」

「ないね、ないのか」

「まあ、何事も経験、経験」

「うん」

「何か、若いのは楽しそうだねえ」

「どしたよ年寄り」

「何でもねーよー、もー」

一番飲みたがっていた人間は、なにやら妙にしょぼくっていた。

さて、あたしは、飲めるのか。

飲めないのか。

おお、何かこれってどきどきする。

無知な私にしてみれば、お酒とは魔法の飲み物に近い。

もっとも飲み慣れた人間にしてもそれは元氣の出る魔法の薬なのかも知れないけれど。

そしてまた一方で、ホントにお酒とはそんな良いモノなのかって言う疑問というか、お仕事で疲れてへろへろの父にして、生きてて良かったと言わせるほどの力がこの液体にあるのだろうか。

そんな半ば半信半疑、そして半ば純粹な期待を抱きつつ。

私はアルミと書かれたソノ缶を穴が開きそうなまでに見つめていた。

「そんな見たら、可愛いそやろ」

「うえ」

「どしたん？」

「いや、ちよつとトリップしてた」

やっぱりアルコールが良いのだろうか。

アルコールランプは使ったことあるが、それと何が違うのか。

「てんこちゃんはさ」

「なんよ？」

「お酒飲んだことあるん？」

「うんー、ないなー」

「え……ないの？」

「うん、え、だってあれやん、未成年やし」

「うん、そのはずなのに、その筈なのにねえ？」

「どしたよ、さっきから挙動不審だな」

「わあ、もうなんだ、お前達法律守れよ！」

まあ、いいか。

我が家には私や桜姉さん、まあ、てんこちゃん、本城氏、ついでにみそつかすの明智君も集まり、祝うこともないのにパーティー気分。

何もしてないのに何か楽しいってカンジ。

いいじゃん、何かイイじゃん。

「それじゃあ、まあ、第一回青春会議を開催いたしまーす」

「あ、乗っ取られたっ？」

「なあ、うつさいな、後で話聞いてあげるから」

「うへへ、そんじゃ、ご馳走になりますー」

「なあ、もう、いいいいいいよ、好きにしろよー、てか、誰かアタシをなぐさめてよー」

「ウメちゃんはお酒飲んだことあんの？」

「や、皆無、故にちようドキドキしてます」

「おお、じゃお互い初体験か、まあ、そんな大それたコトじゃないけどねえ」

「ですね」

「見ているだけでは何だものね、私は緑色の缶チューハイを手にとつてそいつをてんこちゃんに持たせる。」

「タブを引っ張り、カキヨつと音を響かせて、ちょっとしたお酒の臭いが広がる気がした。」

「では、乾杯」

「ども、かんぱい」

「ごんつと、鈍い音が返ってきて、少しばかりこぼして。」

「私たちは顔を見合わせ、チョットあわてて、そしてなんだか笑つて。」

「よし、飲むぞ！」

「おお、さあさ」

「よし！」

「うん」

「あー、もー」

「ん？」

「一緒にのめ？」

「うはは」

「それでは、と一口。」

「ん」

「んふ？」

「んお？」

「どしたん？」

「これは、炭酸じゃね？」

「あはは」

「あ、ちよつとまったやつはお酒だつ、酒の臭いがする、てかお父」

さんの臭いがするッ！」

「えへえ」

「すっげ、口の中がお父さんだ！」

なにやってんだよ、みたいな視線でみんながこっちを見て。

私は見んな見んなって恥ずかしがって。

なんだかてんこちゃんの顔が真っ赤になって。

姉さんが本城に人生相談してもらって。

そんな感じでなんか、青春会議はうまくいっていたような気がした。

なんだ、結構楽しいじゃん。

「で、何で俺もココにいるんだ」

「よお、みそつかす」

「よっ」

「まあ、イイじゃん、私もコーゆーの苦手だったんだけど、何か思ったよりおもしろがってるみたい」

「誰がよ」

「私が」

「ああ、そっすか」

ふと彼の手を見ると握られているのは缶ビールだったりで、顔も全然赤くなってる所を見ても、ホントこいつらはどう思う。

「ビール？」

「んだよ、ビール飲んじゃ悪いだよ」

「いや、お前が飲むことには何ら問題はないが、少しくれー」

「うえー」

「いいじゃんくれよー」

「たく、ホントめんどくさいなア、酔ってると余計にめんどくさい」
諦めたのか何なのか、彼は私にビール缶を押しつけてぱりぱりと頭をかく。

「飲みたきや飲めよ」

「おう」

「だっケドなあ」

「何？」

「流石姉妹だな」

「うっさいなあ」

しかしまあビールつてのは美味しくない。

私は顔をしかめお前こんなモン飲んでンのかと、にらみつけるが。彼はニヤニヤと笑いながらこっちを見ていて、すっかりと乗せられていたことに気づき缶を突き返した。

「ちーくしょ、ハメられたあっ」

「まあ、飲み慣れてないとキツいかもなー」

「飲み慣れるなよお前はよー」

「そう言うお前はまた随分酔ってんな」

言われてみるとそうだと思う、凄くふらふらして、いつの間にか足下はおぼつかなく。

「ダイジヨブか？」

「うえへへ」

「ちよつと、おい、倒れるなよな」

「だいじょおぶ」

「あー、こっち、座つとけ、アルコールだけじゃなくてウーロンとかも飲めよ」

「あ、うん……」

「……何？」

「あ、いやあ別にー、ただ、あんたって意外と優しいんだなって」

「別に」

「照れてる？」

「別にー」

「そっか、まあいいや」

何かチヨット、私の中に暖かいモノが広がる。

アイツは至ってクールだけど、心なしが顔が赤くなっている気がした。

私はイスに腰掛けて、チヨビチヨビとおつまみをつまみながらみんなのことを眺めていた。

フワフワしてて、なんだかあんまり覚えていないのだけど、ソレはソレなりに幸せで。

ソレはソレなりに充ち満ちていたように覚えている。

私の中で、どこかに潜んでいた“みんなで騒ぐ”コトへの抵抗感。ソレは何だったのかとゆっくりとたどってみた。

答えの出るモノではないのかもしれないのだけど。

私是何か、怖かったのかもしれない。

みんなで楽しく過ごすことが普通なコトになっちゃうのが。

楽しみが当然のようになってしまふ、という意味ではないと思う。ソレは私たちにはもっと何か凄いモノが待っていて、お酒や、カラオケとかソンな既存の娯楽にはとられないような、何か凄いモノがあるんじゃないかって。

私たちだけの楽しみのような、私たちだけが紡げる何かがこの世界にはあるんじゃないかって思っていて。

他の人たちと同じように楽しむことに、何か、すんなりとは通らない何かが邪魔をしていたのかもしれない。

今時の若者、みたいな括りが怖かったのかもしれない。

まだ私にとっての私は特別なんです。

普通の人間じゃなくて、ハルカワコウメという特別な私なんです。お酒を飲んではしゃいでいるような、ソンな連中とは違うんです。私の人生なんだもの、それぐらい、イイじゃないですか。

「ただいまあー」

「あんれ、父さん？」

「おー、なんだ賑やかだなあ、桜もいるのか」

「んー、ちよつとね、父さんも飲む？」

「未成年に飲ませちゃダメだろうー、故に一本ちようだい、パパが処分しておこう」

「はい」

命の水を得た父は、にたにたと笑いながらこちらへとやってきた。私の隣にどっかりと座って、いつも通りに缶ビールのプルタブを引つ張った。

「おー、真っ赤だな飲んだ？」

「うん」

「どうだ」

「きもちつす」

「そりや良かった、まあ、アルコールは適度にね」

「ん、ごめん」

「なにが？」

父は笑い名から私の顔にビールの缶をあてた。

「やは、未成年なのに飲酒して、あー、つめたい」

「ああ、まあ、なあ、小梅は細かいからな」

「何ですか」

「やあ、小梅のそういうトコロだけは母さん似だなあっと思って」

「へえ……」

「母さんは酒も弱いんだよな、見たところ小梅もそんな感じだけど」

「うん、かなあ、チューハイ一杯でふらふらする」

「だはは」

くいつとビールを喉へ流し、手元で缶を回しながら父はぼそりぼそり、言葉を選んで並べていくように話し出した。

「母さんはさあ、飲めないけどさ、飲み会とか、そういうの積極的

に参加するヤツなんだよね」

「そうなんだ、確か大学同じだったんだよね」

「んー、まあ別に当時はソコまで親しかったわけでもないけど、それでさ、でもさあ、アイツは参加するって言うか、呼ばれることが多かったらしいんだよね」

「へえ」

「桃子さんと飲んでると楽しいってさ、よく言われてたらしいよ」
ソんなことを言う父の顔は、なんだか少しだけ誇らしげだった。

「何かいいねそいうのって」

「うん、アイツはさ酒は飲めないけど、酒の飲み方は上手いって、そう言ってた。小梅もそんな女になればいいさ」

「なれるかな？」

「そりゃ解らん」

「えー」

「なりたきや頑張らねばね」

「お、おうー」

母は、きつと多くにとつて特別な人だったのだろう。

それは、一緒に飲んでいて楽しいと言った人達にとつても、モチロン父にとつても。

私も、ソんな人間になれるかな。

自分に対してだけではない、他の誰かにとつてのかけがえのない誰かに。

「おー、みんな飲んでるかー？」

「小梅こそ飲んでるのー？」

「うえへへ」

私にもきつといつか、今時の若者みたいな、ソんなくくりの中で楽しく過ごす日々が来るのかもしれない。

そんな時はもう特別な私とか、他にはない私だけなんてモノは、どうでも良くなってしまうのかもしれない。

べつに、今時のソレであることが、特別な私であることと直接結

びついているというわけでもないのだけれど。

かといって全くかけ離れているというわけでもないような、そんな気がする。

私の中には、お前達とは違うんだという、意地汚い根性がまだ居座っていて離れようとはしない。

だけど、この青春会議がその壁を若干ながら崩してくれたような、ソンな気がする。

それが良いことか悪いことか、その判断こそつかないけれど。

きつと今は幸せで、きつと今は暖かい。

私をかわいそうなヤツと笑うなら、ソレはきつと正しいのだろう。だけど私は捨てられない、大切にかけがえのない特別な小梅ちゃんを。

ハルカワコウメ

舞台の上には二人の女の子がいて、その一人はおとなしく内向的な女の子であり、もう一人は活発で男勝りな女の子。だけどその二人は本来の姿ではなく、言ってみればおれがあいつであいつがおれで状態にある……。

それがこの演劇のお題目だそうで、使い古された設定ではあるもののそれを劇としてみるということは今までにない経験だった。

後ろ向きな女の子を演じるまおは一転して勝ち気で粗暴な性格に。前向きな女の子を演じていたてんこちゃんは一瞬の間に引っ込み思案でしょぼしょぼな性格に。

初めのうちこそ演劇だと理解しているのだけど、話が進むにつれて私はその世界に引き込まれていき、いつの間にかまるで本当にその二人が入れ替わってしまったかのような錯覚すら起こしてしまう。私は2人の持っているそんな能力に驚かされ、そしてまた自身のヒトのとらえ方自体が、こんなにも臆気であるコトに驚かされた。

コレは劇ですって言われなかったら本当に人をだませるような力だから。そしてそれをこの二人は持っている。ソレって凄いな、なんて素直に感動していた私がまだそこにはいた。

「ちょっとお前、なんだソレ！」

「何がだよ急に」

「や、凄かったです。ハイ、てんこちゃんも！」

「あ、どもですー」

「あんたに言われると何か素直に受け取れない自分がいるなあ」

「あはは」

「ソレ、ナチュラルに傷つきますよ」

演劇が終わり舞台裏へと駆け込んだ私の前に、彼女たちは舞台の

余韻すら残したまま現れた。一瞬どつちがどつちか解らなくなりながらも、その興奮に勢いづいて彼女たちへと飛び込んでいく私。

「まあ、アリガト」

「うん、んー、あー、なんかまた今度演劇あつたら見に行くよ、かあ、なんて言うかさ、アレ私の友達！　って自慢したくなりそう！」
「なんや照れるなあ」

「照れるけど、それは実行には移さないで欲しいなあ……」

「うえへへ、やらねえよやらねえよ。えっとー、2人はこの後何か用事ある？　まだ劇とかやるの？」

「うん、いや、とりあえずは今日の所はもうないねー、まだ明日はあるけど、んふー文化祭見て回る？」

「見たい、見て回りたい」

「んあー、ごめんなあー、アタシはさあ、ちよつちこの後用事があるんよ」

「あ、昔の友達とか来てるの？」

「いや、何というか、ちよつとね……父さんの会社の関係でね、あんまり言うちゃいけないのだやど」

「あはは、そか、なら言うな言うな」

「ん、何？」

「やや、まあちよつと家庭の事情」

「ふーん、家庭ねえ、あーじゃあまとりあえず。また明日ー……つてコトで良いの？」

「そういふ感じで、ホンマゴメンねー」

そんな感じで私たちはんこちゃんと別れた。本当はてんこちゃんとも一緒に良かったのだけど、ソレはソレでコレはコレ。他のクラスメンツと行くことはあっても、まあと2人だけで文化祭を見るといのは実は初めてのことであった。

周囲を気にせずいつも通りに振る舞えるようで、なんだか少しワクワクしてしまう。一般の来場者もあり、いつもとは違う活気に校内は沸き立っていて、ソレは私のお祭り気分を数倍に盛り上げてく

れていた。

「よし、食うぞ！」

「やっぱそこなのか」

「だあって良いじゃないかつ、去年はクラスのみんな付き合ってたらゼンゼン食べれなかったし」

「や、別にダメとは言わんけど」

「じゃあ決定だ、綾校食べ歩きツアーの開始です！」

「元気だなあ」

「元気！」

「何ソレ」

文化祭案内のガイドマップは紙の節約と言う名目もあってその一部をデータ形式で配信している。私は高校のホームページからそのデータを引つ張り出し、コンタクトの端っこに表示させていた。単なる文化祭の割には検索機能なんかついてたりして、凝ってるなあ、となんだか唸らせられてしまう。

いったい誰が作ったのかとも思うけど、最近はテンプレがそろってるみたいで高度に見えるコトも実は結構簡単な仕掛けがあったりするモノみたい。

「前から思っけどさ、あんたよくコンタクトでインターネット出来るよねー」

「ん、まおは出来ないの？」

「なんて言うか、視線操作が未だに慣れなくてさ、目が回ってくる」

「あはは、まあね人それぞれあるかも、うまいヒトなんかは指でタイピングするより早く文章書けるとか言うけどね」

「そんな人の目の動きなんて見たかないよ」

「ん、さぞかしキョロキョロしていることでしょう」

「ぜってー、怖いな」

「んー」

先ほど出店で買った缶ジュースを飲み干すと近間のゴミ箱へと投

げつける。ガコンと鈍い音がして、縁にはじかれた缶は的外れの方
向へ飛んでいく。

渋々入れ直しに立ち上がる私。

「ちゃー」

「何やってんだか」

「あー、そういえばさー」

「何？」

「アイツは、あの明智だっけ、はどしたの。舞台出てなかったよね」

「ああ、アレは、お店の方いるよ、たぶん今も焼きそば焼いてる」

「へえ」

「何か人気あるのよアイツ、可愛いからかね」

「中身そうでもないけどね」

「うん、知ってるヒトからはよくそういわれる」

「うはは」

「もうちょい愛想良くすればいいのにね、そうすれば少しはモテる
だろうに」

「うんー、まあ、そうかもねえ」

するとちよつとばかり俯いていたまおはトンでもないことを言い
出す。

「なあ、ちよつとガールズなトーク気味だけどさ、いい？」

「別に良いけど、何、急に」

「うん、アタシは思うのだけど、明智ってさ、あんたのこと好きで
ない？」

「はあ……はあ？」

「やあ、アイツ結構あまのじゃくだからさ、気にしてる相手ほどッ
てことでさ」

「そりゃあ嘘だろ、ないって、ないよ」

「いや、あるよ！ あるね！ ぜってーあるね！」

何かやばい、急に顔がほてってきている気がする。

良くは解らないけど、そういうのってアリなのだろうか。

「なにさー、真っ赤になっちゃってー、ほれほれ」

「つつく馬鹿、てか触るな」

「ハイハイ、まあー良いけどさ、ちょっと思ったから言ってみただけだし」

「うんー……」

「……？」

「なー」

「なんでしょ？」

「好きってさー、どんな感じだろうな」

「ん、え、えー」

「なんて急に言われても困るか」

「んー、あはー」

何だかんだ言ったって、まおも恋愛歴はゼロに等しい、ハズ。曖昧に笑ってごまかしているけど、明らかに目は泳いでいた。

「何か、あたしらもつと女にならんなあ」

「いや、はい、同感です」

「まおはさ、好きな人とかいないの？」

「おらんかもね、おったかもしれんケド、テレビの向こうとか」

「んー、そっか」

「何かさ、好きって言うのってさ、なるモンじゃなくてさ、気付くモンとかさ、何かそういうロマンチックなモンだと思ってたのよね」

「実際はどうにもですねー」

「まあ、そんなモンですね」

そして私は先ほどから妙な鼓動を続ける胸を押さえる。ああ、何かがおかしいって、自分の中の思いを繰り返し反復してみた。

2、3回頭の中で同じようなことをリピートしてみて、それでもその違和感は消えず私の中にはいつもとは違うもやもやがこびりついている。これってもしかして、私本当に……。

ふと、そんな考えがよぎった瞬間、携帯の着信音が響きそんな思

考は中断された。

「あ、メール？」

「ん、みたい……あぎ、29文か」

「あはは、何々」

「開くの？」

「何でよ、開けよ」

「ウイルスとかだったらヤじゃん」

「別に、ダイジョブでしょ」

「はいはい」

そうして私はその見たことも、会ったこともない送り主からのメールを開く、そこには非常に簡潔な文でたった一つの忠告が記されていた。

「頭上……に注意してください？」

「何ソレ？」

「さあ……」

そして、ソレと同時に私たちの周りを歩く多くの人々の携帯が次々と鳴り響く。まるで連鎖反応のように広がるソレはちょっとした着信メロディーによる不協和音を生み出した。

内容こそ解らないが、おそらくはこの文面と同じモノ。

この場にいる全ての人々へ、この29文は送りつけられているのかもしれない。

「おお、マジか」

「凄いね、こんなコトあるんだ……どうする？」

「うん、どうしよつか、と言うかどうかすることなのか？」

「んふふ、なんとも……って、あれ」

ソコで私はふと、チョットした疑問を抱く。

「何………あっ………」

「まあに、来ないね」

「え、あ、そうだね、おかしいね」

「ハブかれた？」

「あはは、ちよつと複雑な気分だな」

校内放送が鳴り響き、数人の先生が呼び出されている。何かしらの説明があるかも知れないと、その場で待っていた私たちだったがそれらしい何かもないままに5分、10分と時間は刻々と過ぎてき、時刻は既に夕暮れ近づく。

秋の夕暮れは少し肌寒く感じる、私は上着のボタンをとめて澄んだ赤さを持つ空を見上げた。

別段何が降ってくるというわけでもなく、空はいつも通りに広がっている。

「何でもない感じ？」

「みただけどね……」

「少し、涼しくなってきたね」

「そろそろ教室戻ろうか」

「あ、うん……」

「テレビとか、出たりするかな」

「ローカルだったら行けるかもね」

「ソレはソレで楽しみ」

「うはは……」

校庭側へと周り、最後に一通りお店を見ながら校舎の正面へと周る。学生や来場者も既にさっきのコトなど気にする素振りもなく、祭りは佳境に向けて最後の盛り上がりを見せていた。

皆が忘れた頃になってはじめて思い出したように校内のチャイムが鳴る。

「あ、来たね」

「ん、柳先生かな？」

「えー先ほどの迷惑メールの一斉送信の件についてですが……えーと、おそらくは本校に対する悪戯、嫌がらせのたぐいと思われます。えー……ご来場の方々には大変不快な思いをさせてしまいましたこと、お詫び申し上げます。念のため屋上近辺などに危険物がなければ教職員と警備員にて調べましたが問題はありませんでしたのでご

「安心ください」

「だってさ」

「うん……」

「まあ、そんなモノかね」

「あはは、まあ、こんなモンですね」

事件なんて起こらない方が良いのだけれど、ちょっとばかり何かを期待していた私は何処か期待を裏切られたような気がしてしまう。繰り返される放送を耳に素通りさせて、私は再び空を見上げる。

「まあー」

「なーんじゃ」

「落ちてくるならさ、何が良い？」

「あー、えへー、なんかなあー」

「隕石とか」

「うはは、まあ、みんな一緒に吹っ飛んじゃうならそれはそれでも良いかな」

「あ、彼氏とか」

「そやね、天からのプレゼントならありがたく貰おう、なんだかそんなのもう昔の話だなー」

「うふふ」

校庭から見上げる空は高い、雲が何層にも広がっていて、端の方から日に向かってゆっくりと青みがかっていくグラデーションが何とも綺麗だった。夏の夕焼けと比べると、秋のソレは悲しくて、寂しいモノに感じる。夏のソレが広がる夕日なら、秋のソレは突き刺す夕日。澄んだ空気と、心地よい秋風がそんな雰囲気を作り出していた。

来場者の人気も徐々にまばらになり、後片付けを始める生徒達の声が祭りの残り香のようにちよつとした名残惜しさのようなモノを与える。

まあ、とはいえ明日も文化祭は続くし、明日もまた夕日は沈んでいくのだろう。

私は腕を組んで背筋を伸ばし、そうしてちょっと細く長いため息をついた。

「……………あれ」

「どしたの？」

「まあ、何あれ」

「何って何？」

「屋上！ あれ……………ッ！」

私は反射的に校舎へと走り出す。

「ちょっと待って！」

私の声を聞いて屋上を見たのか、周囲が少しざわめいた。

「や、嘘……………」

とんだ。

誰かなんて解らない、フェンスをよじ登って一人の女生徒が屋上から飛び降りた。周囲から訳のわからない悲鳴が響き、それは場の混乱と混じり合って校庭を埋め尽くす。

私が見上げると、そいつが落ちてきて。それは私に当たることなく、私の目の前に落ちた。

ゴッ、と鈍い音がして一瞬だけビクリと動いた彼女はそれ以降動かない。

私は身体の中からこみ上げてくる何かを飲み込み、しばしその場に立ちつくす。

それ以外、何もすることなんて出来なかった。

「こつめ、下がってっ！」

意識の遠のいていた私はまおの声で反射的に校舎から離れる。

何事かと空を見上げればまた二つの人影がフェンスを跳び越えた。

「ひうつ」

再び大きな悲鳴が周囲からこだまして、私も訳のわからない声を上げて、そしてまたソレを見ていることしかできない。

飛び降りた二人は何かを叫びながら空を舞い。

緩い放物線を描いて地面へと落ちた。

「なにになに！？ 小梅、ダイジョブ？ ケガしてない？」

「え……………あ、あうん」

一人目が胸から地面に落ち、苦しそうに笑いながら、ぷ、と血を吐いた。

もう一人は足から落ち腕で地面を這いながら一人目の所へ行き、何事かを耳元で呟いている。

「あ、あ……………」

「小梅？」

「屋上、行かないと、まだ人いるかも！」

「え、あ、待てッてば」

私はまおを振り切って校舎へと駆け込み土足のまま階段を駆け上がる。

階段を上っている間、また外から悲鳴が聞こえた。

胸の中がごちゃ混ぜになったように痛み。喉もとが酸っぱい。

「屋上、つてドコだ！？」

最上階を右往左往しながら私は天井の上からする罵声に気付く。

喧嘩というか、なにかを止めようとするような悲痛な叫び、もう既に誰かが屋上へと上がってるのかも知れない。

ソレが余計に私を焦らせ、胸の中だけではなく、体中がごちゃごちゃになったように何も訳がわからなくなった。

「あつた、階段！」

校舎端の非常階段が屋上へ続いている。

開けられたままの扉が誰かが駆け込んでいったコトを教えてくれる。

「先生え！」

駆け上がった屋上では数人の男子生徒と教師達が飛び降りんとする生徒達を止めていた。

説明出来る光景ではなく私はうろたえたままにその場に立ち竦む。

「小梅！ そいつを！」

教師の一人が私の名を呼び、フェンスに手をかけている一人の生徒を指さす。

「私が!？」

「いいから！」

怖くつて、怖くつて、足が震えた。

その男子生徒へと駆け寄って身体を押さえつけるのだけれど、彼の力であつという間に引き剥がされて私はコンクリートの床に投げ出される。

「だッ……！ やっ、めなよ！」

私は叫ぶけれど、彼は聞く耳も持たず。

そうしてそのまま私の視界からいなくなった。

「うお！ らあ！ ダイブ！」

彼の顔は笑っていて、それはきつと、この選択が苦しみによって選ばれたモノではないことを物語っているのだと思う。

彼らの死に、そしてこの場所になかったモノ、ソレは誠意だったんじゃないかと、私は思った。

あの日の夕日、血のような赤に染まった学校の景色。 たぶん死ぬまで、私は忘れるコトはないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8287e/>

今を生きるわたしを生きる私

2010年10月20日18時18分発行